

The page features a decorative background consisting of a grid of small dots. The dots are arranged in a 10x4 pattern. The top and bottom rows consist of teal dots, while the two middle rows consist of red dots. The title 'URP GCOE DOCUMENT 14' is centered between the top and second rows of dots.

# URP GCOE DOCUMENT 14


アート市場への挑戦：障がい者の芸術表現の可能性

Challenge to the art market:  
Possibility of the artistic expression of the disabled people





# URP GCOE DOCUMENT 14



アート市場への挑戦：障がい者の芸術表現の可能性

Challenge to the art market:  
Possibility of the artistic expression of the disabled people



本報告書は、2014年1月11日にりそな銀行大阪本社講堂で開催されたシンポジウムの記録である。



## 目 次

---

概要	5
開会あいさつ	6
対談「障がい者の自立支援——アート活動の視点から」	8
大阪府からの事業説明	22
パネルディスカッション 「大阪府の“アートを活かした障がい者の就労支援事業”の課題と展望」	26
参考文献・参考URL	43
登壇者プロフィール	44



## 概 要

### シンポジウム「アート市場への挑戦——障がい者の芸術表現の可能性」

#### 趣旨：

近年、障がい者の芸術表現に対する関心と取り組みが広がりを見せ、海外からの注目度も高まっている。しかしながら、「表現したい！」という思いを受け止め、創作環境を整えていくには多くの課題がある。

大阪府は2008（平成20）年度から「アートを活かした障がい者の就労支援事業」を開始し、作品を“現代美術”として評価するとともに、アーティストとしての自立可能性を公民協働で模索してきた。これまでの成果と課題を検証しながら、アート市場への挑戦について議論するために本シンポジウムを開催した。

日 時：2014年1月11日（土）13：30～16：30

会 場：りそな銀行大阪本社講堂（大阪市中央区備後町2-2-1）

参加者：400名

主 催：大阪府、大阪市立大学都市研究プラザ

協 力：りそな銀行、りそな総合研究所、毎日新聞社、NPO法人都市文化創造機構

後 援：厚生労働省

#### プログラム：

13：30～13：40 開会あいさつ

13：40～14：45 対談

「障がい者の自立支援——アート活動の視点から」

村木厚子氏（厚生労働事務次官）

今中博之氏（社会福祉法人 素王会 理事長／

アトリエ インカーブ クリエイティブディレクター）

14：45～15：00 休 憩

15：00～16：30 パネルディスカッション

「大阪府の“アートを活かした障がい者の就労支援事業”の課題と展望」

パネリスト \*50音順

笠谷圭見氏（PR-y主宰／RISSI INC. 取締役副社長）

藤原明氏（りそな総合研究所 プロジェクト・フェロー／

りそな銀行大阪地域インフォメーションオフィサー、

法人ソリューション営業部アドバイザー）

南畷宏氏（美術評論家／女子美術大学教授／武蔵野美術大学客員教授）

山口孝氏（ギャラリーヤマグチ クンストバウ代表／ART OSAKA相談役）

コメンテーター 村木厚子氏・今中博之氏

モデレーター 佐々木雅幸（大阪市立大学都市研究プラザ所長／同大学教授）

16：30 閉会

※登壇者の肩書きは開催当時のもの

## 開会あいさつ

酒井 隆行（大阪府福祉部長）

○司会 ただ今からシンポジウム「アート市場への挑戦——障がい者の芸術表現の可能性」を開催いたします。本日は府内だけでなく、他府県からも多くの方々にお越しいただきました。誠にありがとうございます。本日のシンポジウムは、障がいのある方々が制作された作品を現代アートとして評価し、自立の可能性を拓いていくために、皆さまとともに考える機会として開催するものです。これから約3時間のシンポジウムとなりますが、どうか最後までお付き合いくださいませう、よろしく願い申し上げます。

なお本日は、聴覚に障がいがある方々の情報保障のため、手話通訳並びに要約筆記を行います。私の隣で今、手話通訳を行っていただいておりますのは、大阪聴力障害者協会の皆さまです。ステージの右側で要約筆記を担当していただきますのは大阪府中途失聴・難聴者協会の皆さまです。

それでは早速シンポジウムに入ります。はじめに主催者の大阪府及び大阪市立大学都市研究プラザを代表しまして大阪府福祉部長の酒井隆行よりごあいさつを申し上げます。

○酒井 皆さん、こんにちは。本日は年明け早々のためご多忙であったかと思いますが、こんなに多くの方々にお越しただきまして、本当にありがとうございます。心より感謝を申し上げます。

さて、障がい者の皆さまの自己実現、あるいは自立と社会参加ということにつきましては当事者の方々はもとより、それを支える周りの皆さま、そして地域で暮らす皆さん、あるいは社会全体、私ども全員が共有できる切なる願いであると思います。そ



の願いを実現するためにどのような施策を講じればいいのか。行政だけでなく関係団体、みんなで力を合わせて知恵を出してやろうと、さまざまな取り組みをしているところです。

そうした中にありまして、本日のテーマにもなっている障がい者の芸術表現は、これから大変重要な鍵を握るものになっていくだろうと思います。

大阪府では、2008（平成20）年度から「アートを活かした障がい者の就労支援事業」を実施しております。これは障がい者の皆さんの作品を現代アートとして評価するとともにアーティストとしての自立の可能性を探る。そのための仕組みをどのようにつくるかということを検討するというものです。

これまでの取り組みにつきましては、後ほど担当課から説明いたしますが、本日のモデレーターをお願いしている大阪市立大学都市研究プラザ所長の佐々木先生、コメンテーターをお願いしている今中さま、そしてパネリストをお願いしている笠谷さま、藤原さま、南郷さま、山口さまにも大変なご尽力を賜りました。この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

本日のシンポジウムは、これまでの約6年間の取り組みの成果と課題を検証し、そして次のステップとなるアート市場への挑戦について、さらに議論を深めていただくことが狙いです。障がいのある方々が芸術を通じて表現したいという思いを受け止め、創作環境をどのように整えていけばいいのか。さらには、それを生きる糧としてどのようにつなげていけばいいのか。そのためにみんなが何をすればいいのか。これはまさに共生であります。今、私たちはこの大きなテーマに果敢に挑戦し、知恵を絞り、汗をかくことが求められているのではないかと考えています。





大阪府といたしましては、公募展を引き続き計画して実施してまいりますとともに、本日のシンポジウムを含めまして、就労支援、市場への挑戦という大きなテーマですが、そのための新たな仕組みというものをついていきたい。そのためにしっかりと取り組んでいきたいと思っておりますので、シンポジウムでは今後の取り組みの指針となる活発なご議論を期待しております。

本日は厚生労働省の村木厚生労働事務次官にもお越しいただきました。大変心強く、そして力強い味方になっていただけると確信しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

結びに共催いただきました大阪市立大学都市研究プラザ、会場を提供いただきましたりそな銀行、ご後援いただきました厚生労働省をはじめ関係者の皆様のご協力に厚く感謝申し上げますとともに、ご参加いただきました皆様方のご健勝とご発展を祈念いたしまして、私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 対談「障がい者の自立支援——アート活動の視点から」

村木 厚子（厚生労働事務次官）

\*敬称略

今中 博之（社会福祉法人 素王会 理事長／アトリエ インカーブ クリエイティブディレクター）

### シンポジウム開催までの経緯

○司会 では、ただ今から対談を始めます。まず、ご登壇いただいたお二人をご紹介します。会場の皆さまから向かって右側が厚生労働事務次官の村木厚子さま、左側がアトリエ インカーブのクリエイティブディレクターをされている今中博之さまです。お二人のプロフィールはお手元のプログラムにも詳しく記載していますので併せてご覧ください。では、この後の進行はお二人にてよろしく願いいたします。

○今中 今日は本当にたくさんお集まりいただきありがとうございます。告知期間が非常に短かったのですが、約400人のご参加ということで、これも村木さん

のファンがたくさんいらっしゃるおかげではないかと思えます。関西に村木さんが来られるのは非常にまれでして、僕も関東でお会いするケースがほとんどなんです。今日は第一部として60分間、村木さんと僕の対談形式で進めさせていただきますが、二人で対談するのは初めてですし、普段はだいたい食事をしながらお話ししたりしていて、このような公的な場での掛け合いは村木さんも僕も慣れていないので、少しチグハグなところがあるかもしれませんが、ご勘弁ください。

村木さんと最初にお会いしたのは10年前ぐらいだったと思います。アトリエ インカーブを設立して1年ぐらい経った頃、たまたまご縁があってお会いしました。そのときの僕の印象は今とまったく変わらず、いつもニコニコされている方で、「ああこのような方が厚生労働省にいらっしゃるのだ」と思ったのが第一印象ですね。それからい

ろいろプライベートなことも含めてお付き合いさせていただいています。

皆さんご存じのように村木さんは昨年7月から事務次官になられ、3万人強を率いておられます。「障がい者とアート」というテーマだけでなく、年金、雇用、高齢者、女性、医療、本当にたくさんの分野に関するお仕事をされているので、今日は俯瞰的な立場で、忌憚のないご意見を願います。

○村木 はい、わかりました。でも、こういう場合は本当に緊張しますね。焼肉屋のような場だったら大丈夫なんですけど（笑）、よろしく願います。

○今中 今日は対談のキーワードを9つ設定してみました。その前になぜ今回のシンポジウムが開催されたのかということ、経緯も含めて少しだけ説明させていただきます。

まず、2007（平成19）年12月から2008（平成20）年6月にかけて厚生労働省と文部科学省が「障害者アート推進のための懇談会」を開きました。その頃、そして今もほとんどそうですが、障がい者の方々のスキルアップに関することは厚生労働省の管轄です。大阪府でいえば福祉局や福祉部というところが管轄なのですが、そこだけすべて完結できるものでもありません。障がい者アートに関しては当然、文化の担当部署とともに車の両輪になってくれなければ進まないと思っていました。そのあたりを機会あるごとに話していました。

そして村木さんが尽力してくださって、いろいろな方面からアート系の方、当然、障がい者アートの施設の方々にも集まってもらってスタートしました。その懇談会を受けて去年の夏、構成メンバーが変わりましたが、2回目となるような懇談会、このときは厚生労働省と文化庁が「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」





を開催したのです。

そうした国の取り組みとは少し重なる部分もあるのですが、大阪府のアートを活かした障がい者の就労支援事業は2008（平成20）年から今日現在までやっているというわけです。

今日は全国から福祉関係の方がたくさんいらっしゃいますのでご存じだと思いますが、アートに関する取り組みが全国でたくさん行われています。ただ、大阪府の取り組みの特徴は、作品のカテゴライズはやめておきましょう、現代アートとして取り組みましょうということです。これは他府県ではなかなかみられません。通常はアウトサイダー・アート、あるいは障がい者アート、アール・ブリュットという言い方をします。大阪府はそのようなカテゴライズをせず現代アートとして位置付けていることが特徴です。

それともう一つ、これも他府県ではなかなか、僕が知っているかぎりではやっていないと思いますが、経済的な価値を彼らの作品に付けていきたいと思います。展示会を実施して作品を見てもらって

よかったね、だけではアーティストは霞を食べて生活しているわけではないので、経済的な価値を付けていただく。この2点が大阪府の事業の特徴です。

ダブルアシスト

**山高ければ裾広し**

金平糖の先っぽ

**適材適所**

運池…  
共通言語は必要か

**すべては人**

当たり前が普通に実現する社会

**迷ったら原点に**

内なる障壁

### “金平糖の先っぽ”

○今中 さて、今日の対談テーマは「障がい者の自立支援——アート活動の視点から」です。今からスクリーンに用意してきたキーワードを9つほどお見せします。先ほどお話した2つの懇談会などからキーワードを拾い上げてみました。この対談では、このようなところをしゃべっていきたいと考えています。前段が長くなりすみま

せん。

では、まずは“金平糖の先っぽ”というお話をしたいと思います。これは村木さんにアトリエ インカーブを評していただいたときの言葉です。その当時、村木さんに話していたのが障がい者の働き方、一般就労と専門就労についてです。働くことの大切さはよく言われるのですが、一般就労をされているのは身体障がいの方が多くて、知的障がいや精神障がいの方はかなり少ない。そこで、インカーブのアーティストのような働き方を専門就労、つまり、特殊な技能によって雇用契約を結ばずに就労していく文壇家や芸術家、舞踏家などを指して、そのような働き方を専門就労と呼びたいのですという話を村木さんにしたとき、「あなたたちは金平糖の先っぽみたいな人たちね」と10年ぐらい前に言っていただいたんです。最初のとっかかりとして、そのあたりの記憶を少し呼び戻していただけますか。

○村木 そうですね。一般的にどこでもやれることではなくて、ずいぶん変わったこととか、けっこう尖ったことをやっているね

という話を最初にして、そのときに金平糖という例えを出したのはたぶん今中さんだったと思います。ふつう、イメージする金平糖は小さな粒なので、「金平糖というのは謙遜しすぎではないの」と言っていたのですが、その直後にテレビで金平糖の作り方を紹介しているのを偶然に見たんです。すると、大きな金属の球体みたいな釜があって、中は空洞なのですが、その中に金平糖の核になる何か小さなものとお砂糖を放り込んで、釜を温めながらぐるぐる回すんです。そのうち不思議なことに最初は



丸い玉だったものにトゲトゲが生えて金平糖ができてくるのです。それを私はすごく面白いと思いました。普通はいろいろなものをいっぱい放り込んでぐるぐる混ぜると角が取れて丸くなると思うじゃないですか。それがどんどん角が尖っていく。これはいいなと思って。確かにそのような意味ではインカーブの活動を金平糖と言ったのは当たっていたと。ぐるぐる回してどんどん鍛え上げていくうちに丸くならずどんどん尖っていく。それ以来、“金平糖の先っぽ”というのは気に入っています。

#### 金平糖の核になっているもの

○今中 そうですか。初めて聞かせていただきました。先っぽではなくて真ん中、核の部分はどのようなものかと思っていらっしゃるんですか。

○村木 何なのでしょう。今中さんの最初の核って。

○今中 最初の核ですか。僕は専門的な障がい施設に入ったことはなかったのですが、30歳ぐらいから、いろいろな施設を見たり聞いたりしていきました。もともと空間デザインの仕事をしていた、どちらかと言えば商業系の施設が多く、レストランや美容室の設計に携わっていました。そうした施設ではいかにお店の個性を出すかが重要だったんですが、福祉関係の施設へ行くと、どこへ行っても同じというか金太郎飴みたいだなというのが、最初でしたね。

○村木 なるほど、なぜこんなに似たり寄ったりなのだと。

○今中 そこで行われているサービスまで似たり寄ったりだとはわからなかったのですが、施設という表層的な部分だけ見るとそういう印象でしたね。

○村木 その小さな核がころころ回るうちにだんだん……。

○今中 トゲが立ったのかもしれませんが。

よくアーティストのお母さん方が言われるのは、「福祉施設はどこへ行っても金太郎飴みたいなものやけど、インカーブという施設のありようは好き嫌いがすごく分かれるかもしれない。だけど、選べるという意味ではとてもいい」と。

○**村木** ご本人がどの施設へ行きたいか選ぶのは、今の福祉の考え方のベースですよ。2000（平成12）年に社会福祉基礎構造改革が実施されたとき、一番大きな変化は、契約という考え方が持ち込まれたことでした。契約することの本質は何かと言えば、どんなサービスを使いたいか本人が選ぶことです。それまでの措置制度は行政がこのサービスを利用しなさいと決める。そうではなくて自分で選べるようになった。その選ぶときに選択肢がある、金太郎飴ではなくて違ったものが提供されていることは、すごく大事なことです。

○**今中** 選ぶ側からすると、ですね。

○**村木** そうですね。

○**今中** 僕たちがアトリエ インカーブを設立してからの約10年間で、福祉全体の状況は確かに変化してきている気がします。各施設の運営方法などに差異が出てきて、とくにアートを中心に活動しているチームというのは、より強くそれを意識してやっている方々が多くて、それでこの10年間で変化が確立できたように思いますね。

○**村木** そうそう、私はお正月に箱根駅伝を見るのが大好きで、今年も見えました。箱根駅伝の放送は途中で流れるコマーシャルが多いのですが、ビール会社のコマーシャルがずっと流れていて、今年のビール会社のキャッチコピーは、「丸くなるな、星になれ！」でした。どこのビール会社か忘れましたが。

○**今中** 星はわかりますね。

○**村木** その言葉を聞いて、先ほどの金平糖を思い出して、いいなと思いました。「丸

くなるな、星になれ！」、そういう意味では福祉の世界もだんだんと星が、スターができていくことは自然の流れかもしれませんね。

○**今中** もう一つ金平糖のところでお訊きしたかったことは、村木さんにとって最初の核は何やろうということです。長くお付き合いをしていますが、実はあまり村木さんの歩んでこられた道のりを知らなくて……。このお正月に今日のシンポジウムの準備も兼ねて、村木さんのプロフィールを拝見していたのです。そうしたら1997（平成9）年に労働省の高齢者や障がい者の雇用対策課長をされていたことを初めて知りまして、そのあたりが障がい者の方々と接点をもったスタートですか。

○**村木** そうです。1978（昭和53）年に労働省へ入って、1997（平成9）年に高齢・障害者雇用対策部障害者雇用対策課へ配属されたんですね。障がいのある人が働くことに取り組むということが、私と障がいのある人たちとの仕事上の出会いだったのです。やっていくとすごくたくさんの方がいました。いろいろな障がいがありますが、我々が現状を知らないでイメージしているよりも、ずっとたくさんの方ができる。仕事をされている人たちには、何かができないハンディの部分がありますが、それ以上にできることがすごくあるんだということがだんだんわかってくる。知的障がいをお持ちの方々も、いろいろなことができる才能のある人たちだということがわかりました。

その後、2001（平成13）年に厚生省と労働省が合併して厚生労働省になったとき、障がい者福祉をやれと言われて非常にうれしかった。その仕事をやる中で一つショックだったのは、私が雇用の場で見ていた働いている人よりも、ずっと障がい程度の軽い人が福祉の場にいた。これは相当ショッ

クだったんですね。つまり、いろいろなことができるということが、まだ認知されていない。親であったり、学校の先生であったり、福祉の人たちが、この人たちはもっとたくさんいろいろなことができる。いろいろな才能や能力があるということがわかっていないのではないか。周りができないと思い込んでいるから、サポートがないからできないのではないだろうか。だから、もっとサポートを強化したいと、そのとき私は思ったのです。

ちょうどその頃に福祉関連の会合で、障がいのあるお子さんを持ったお父さんやお母さんたちにお話をする機会があって、いろいろな能力があって働いている人がいますという話をさせていただきました。聞いてくださったのは、ちょうど就職を控えた頃の年代のお子さんを持っているお父さんお母さんで、「村木さん、そのお話は子どもが小学校に入る頃に聞いたかった」と言われたのです。それが今も私にはすごく印象に残っていて、こんな可能性がある、こんな未来がある、こんなサポートがある、ということを知って子どもを育てるかどうかで、その子の未来がすごく変わると感じたんですね。だから、そのようなことをきちんとやっていきたいと思ったのが、私にとっては金平糖の核になるところですね。

### 山と裾野との相乗効果

○今中 僕より前から障がい者との関わりを持っておられるし、村木さんは今も本当にたくさん施設などを訪問されていて、現場の人たちの声をよく聴いておられるので、僕が教えてもらうこともたくさんあります。

では、次は「山高ければ裾広し」というキーワードでお話を進めたいと思います。これは株の相場で使われている「山高けれ

ば谷深し」という格言をもじったような言葉ですが、これをおっしゃったのは以前、大阪府の事業で委員をされていた建畠哲（たてはたあきら）さん、今は京都市立芸術大学の学長をされている芸術家の方なのです。建畠さんが大阪の事業の会議で「山高ければ裾広し」とおっしゃられ、去年の夏、国の会議でもこのことをめぐって議論が展開されました。つまり、すぐれた才能を伸ばすと同時に裾野を広げていこうということを、国の会議で委員の皆さんも盛んに言っておられます。今まで障がい者のアートに関する取り組みは、どちらかというと裾野を広げる活動が多かったと僕は思います。地道に展覧会を行い、地道にバザーを行い、どうぞ見てあげてくださいという活動をされてきた。でも、はたしてそれだけでいいのだろうかとは僕はよく思います。そんなレベルだろうか、この作品たちは。すぐれた芸術的価値をもつ作品だからこそ、きちんと価値を認めてもらえるような、頂点をめざす活動ないしチャンス心を心がけていく必要があるのではないか。そんなことを僕は国の会議でも発言しています。

僕は野球が好きで、村木さんとよくイチローの話をするのですが、このキーワードで言っている「山」はイチローだねと。イチローが活躍しているから、リトルリーグも発展するし、野球界全体が発展する。イチローの前には野茂がいて、野茂やイチローという山があったからこそ、大魔神にしてもマー君にしても、野茂やイチローの姿を追いかけていったんだと思います。アートの分野で山というのは、例えば海外のアートフェアや展覧会で評価されるアーティストでしょう。そして、裾野というのは絵を描くことが好きな人々で、相談支援であるとか、権利擁護であるとか、日常の制作環境を充実するというところをしっかりとやっていくことももちろん大切です。そ

れだけでなく、山の高見を見せることも必要なのではないかと僕は思うんですね。

今まで障がい関係の方からたくさんお話を聞かれて、インカーブのような施設にもたくさん行かれたと思いますが、山と裾野との相乗効果について、どう思われますか。

○村木 この話を私が家ですると、うちの夫は野球じゃなくサッカーの話になります。それで、少年サッカーの人口がどれくらい増えるのかというのが、やはり将来的にすぐれたプロの選手を輩出できるかどうかにつながりますし、Jリーグの選手がヨーロッパなど海外のチームに移籍してもっとレベルの高いところで活躍するかどうか。それができると子どもたちはやはりあこがれて、少年サッカーの人口が増える。そういう相乗効果だよねと、うちの夫はよく言います。

女性もそうですし障がい者の場合もそうなのですが、一般的に弱者だと思われる人たちの世界で、一部の人を評価することはすごく怖いリスクもある。だけどやはり高い山は必要です。高い山であれば裾野も広がる。裾野がきちんと広らなければ、山の頂は高くなっていかないと同じで、高い山のいいところは、まさに遠くから見えるということなのです。どんなに遠くから見えるということなので、子どもでもお父さんお母さんでも山を見て「ああいう人が頂に登った。だったら、うちの子にもチャンスがあるかもしれない」と思えることが大切ですね。障がいがあることはハンディにはならない、できるのだと見える。見えたとたんに目標として近づく。そういうふうを感じる人が増えるためにも、高い山をつくるというのはすごく効果があると思います。もちろん、裾野が広いこともすごく大事ですけどね。

○今中 どうしても尖る部分というか、山の頂に登ったアーティストに対して、やっ

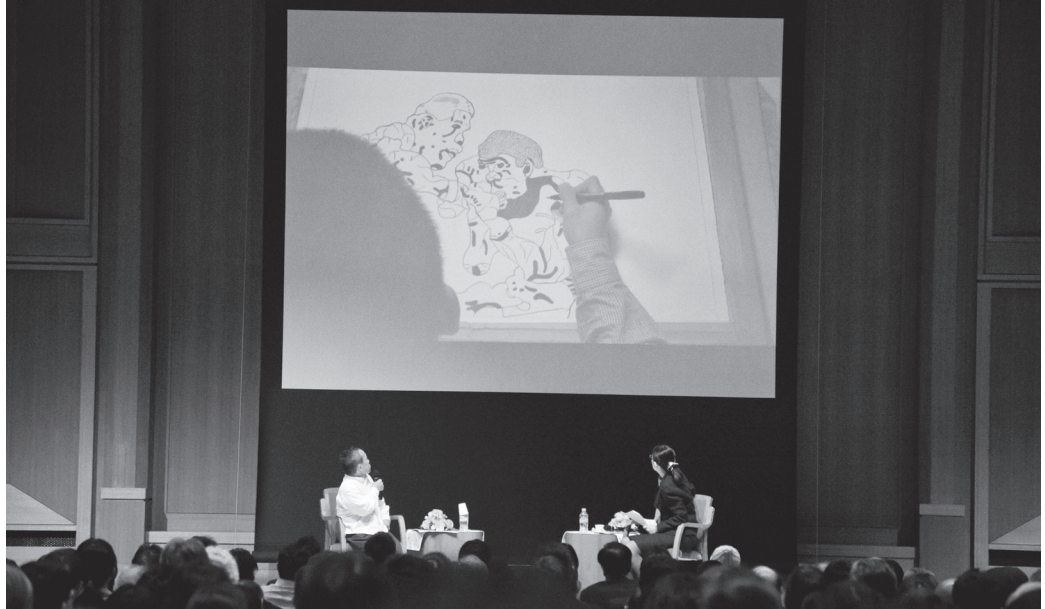
かみがあるというか、少し斜に構えるということも実際にはあるかと思います。でも、僕も遠くから見えるということは大切だなと。目標になる。身近な人が目標になるということはすごく効果が挙がるし、いいことですね。

○村木 そうですね。男女雇用機会均等法ができて20年以上経つのですが、均等法ができた最初の頃は、これは一部のエリート女性だけが恩恵を被る、女性の間の差別になる危険な法律だと言われました。けど今になって考えてみれば、男性も女性も働く人として同じように能力を評価して差別をしないというのは当たり前のことですよ。だから一部の人を評価するリスクというのはよく考えなければいけないのですが、それを恐れて本当にある才能を伸ばしていないというのは、ものすごくもったいないことだと思います。

#### 才能ある人の存在割合は 障がいの有無に無関係

○今中 そういう意味で今日は、アトリエインカーブに所属しているアーティストお二人を、短い動画をご覧いただきながらご紹介します。

アトリエ インカーブは大阪市のいちばん南の平野区というところにあります。今、正面のスクリーンに映っているのは寺尾勝広さんという方です。もともと溶接工をされていました。彼は、自分は絵ではなく鉄の構造物の図面を描いていると言っています。非常に緻密な絵を長期にわたって描いておられます。今、描いているのはリベット、鉄骨を打つときのリベットです。彼は海外でも高く評価されていて、今日は就労もテーマの一つなので率直に販売価格をお知らせしますと、400万円弱で売れた作品もあります。また、金沢美術工芸大学で非常勤講師も務めています。



もう一人が新木友行さん、この会場に彼も来ていると思います。彼のテーマはプロレス、ボクシング、テコンドーなどの格闘技です。今日はゲストとして女子美術大学の教授をされている南郷さんにお越しいただいていますが、南郷さんが彼の作品を見たときに「うちの学生にこんな色が出せるかな。美術教育って何かな」と、ポツリとおっしゃったんですね。彼自身は美術教育的なものを受けていませんし、色彩構成というものを学んだわけでもありません。彼の作品は今、90センチ×180センチのサイズでだいたい70万円から80万円ぐらいで販売されています。

こういうインカーブの取り組みを知って、北海道や九州からも「作品を見てほしい」という方が来られます。「僕らは評価できないので何も言えませんよ」と言っても持ってきてくださるのですが、中には本当にすごいと思う作品と出会うことがあります。ただ、インカーブのポリシーとして、彼らの絵を自分たちでは評価しないでおこうというのがあります。なぜなら、我々は制作サイドだから、外部の美術の専門家に

よって評価をしてもらわなくてはいけないということがルールなのです。だから、せっかく遠方から来てもらっても何とも言えないのですが、家の近くにはインカーブのような施設はなくて、絵を描く環境はなく、軽作業に戻らなければいけない。障がいをお持ちの方、みんながみんな、すぐれた絵を描くというわけではありませんが、クオリティの高さをお持ちの方が割合としては多いというのは、やっけていて思うところでは。紹介させていただいた二人は、本当に外からの評価も高いし、人間としても非常に誠実です。

○村木 楽しいというか面白くて魅力的なお二人ですね。私は美術や芸術というのはまったくの門外漢で、障がい者のアート関係に組み込んでおられるところを訪問した最初の頃、ものすごく素朴なことを質問しました。精神に障がいのある方には芸術的な才能を持った人が多いのですかと。本当に素朴な、思ったままを訊いたら、そのとき私に答えてくれた人が、「障がいのない人たちの中に一定の割合、そのような才能を持った人がいる。少なくともそれと同



じ割合の人がいると思ったらいいんじゃないですか」と言われて、それがすごくすとんと腑に落ちたんですね。本当はもっと多いかもしれないけれど、そういうふうに特別に考えなくてもいい、同じように才能を持った人がいるんだと。じゃあどうしてもっと表に出てこられないのかと考えると、そうか、絵を描いてみると楽しいし好きだということを本人や周囲が発見するチャンスがないのではないか。健常児の場合には好きなことをするために部活に入ってみよう、美術大学へ進学しよう、あるいは趣味でずっと描いていこうなど、いろいろな選択肢が用意されている。だけど障がい児の場合はそういう選択肢がない、あるいは不十分ですね。先ほどお話したように、この人たちに何かができると思っている人がいないから、すぐれた作品があっても埋もれている。

そのように考えれば、障がいの有無に関わらず同じような割合で才能ある人たちがいると思えば、埋もれさせずに発見したり育てたり、そのためのチャンスもうまくつなげていくような形をつくれればいいのかと思います。そうすれば政策的に何が必要かというものが見えてくるなど考えています。

### 名前を付けることの功罪

○今中 環境を整えていくことは重要ですね。そろそろ次のキーワードに移りますと、「混沌…共通言語は必要か」ということを最近思っていて、僕がインカーブを設立して約10年、それまでの活動も含めると十数年やっていて思うのは、混沌としているなど。いったい何が混沌としているかというの一つはやはり環境、それと言葉の問題です。

環境に関しては、具体的には作品を制作する場所がとても小さい施設が多い。なぜ

かと言えば、たいていの施設はアート活動の時間がすべてではないからなんですね。他の作業をしながら休憩時間にアート活動をするとか、週のうち3日だけしている。または施設の利用者さん全員がアート活動をするのではなくて半数だけとか。そうすると画材を購入する費用の問題、展覧会に出品するチャンスの問題等々、お金がうまく回っていかない状況に陥りやすい。そういう意味で環境がチグハグになっているとか整理されていないわけです。

もう一つはインカーブへ見学に来られる施設の方のうち、施設長に内緒で来る方もおられます。なぜ内緒で来たのですかとお訊きしたら、バレたら怒られるからと。なぜバレたら怒られるのですかと訊いたら、アート活動みたいなものは息抜きだと。本来の作業としてやっている煎餅焼きのことを考えず、息抜きのためにわざわざ大阪へ出張しなくていいと言われかねないそうです。そういうふうに、施設長がどちらを向いているかによって環境は大きく変わるなど感じています。

そしてもう一つは、言葉が混沌としているということです。講演会などに呼ばれて行くとよく質問されることなのですが、アウトサイダー・アートと言っているのか、あるいはアール・ブリュットなのでしょうかと。いやいや、インカーブではカテゴリーせず現代アートとして位置付けているとお話するのですが、混沌としていますね。僕としては統合していくべきだと思います。最近ではアール・ブリュットという言葉で括ろうとする動きもありますが、本来のアール・ブリュットという概念はもっとレンジの広いものです。それなのに、福祉団体というのはどうしてもそこだけをリーディングして使いたがっている。美術関係者の方からすれば、「いや、それは違う。少し待ってくれ」ということを僕はよ

く耳にするのです。村木さんはこのあたりをどう感じておられますか、混沌としていますか。

○村木 けっこう戸惑いがあるなと思って見えています。何かに対して名前を付ける、言い換えればレッテルを貼るということは、プラスの面とマイナスの面の両方があるでしょうね。私自身、いろんな方からお話を伺って、理念ではなくて現実的に考えているんですが、やはり名前が付くというのはものすごく一般の人々の中での認知度を上げる。ほやっとわかっていることでも、そこに名前が付かなければなかなか認識が広まらないものです。行政の分野で言うと、いちばん最近の例では「ブラック企業」。そういう企業があるということを皆さん何となくは知っているのだけれども、あまり認知されていなかった。行政はブラック企業という言葉を使わないんですが、マスコミか何か「ブラック企業」と名付けたとたんに人々の認知度が上がって、そうすると行政はなんらかの対策を打たなければいけないという状況になります。そんな意味でいうと、今までは障がい



者ということとアートということを結び付けて考えていない人がほとんどだったのではないのでしょうか。アートによる可能性なんか何にも考えていない、思いつかなかったというところから、いや、そうじゃないということを知ってもらうためには名前を付けることにプラスの面がある。

もう一方でマイナスの面というのは当然出てくるはずで、こういうものだというふうに名前が付いたとたんにそこへ押し込められていく。あるいはそのレッテルが付いただけでもはやされる。いろいろなことが出てきます。だけど、そのようなものがある程度、途中でなくぐらざるを得ないというところがあるのかなと思います。「女性次官」という言葉もそうですよ。

○今中 16年ぶりの女性次官という扱いですね。

○村木 女性次官と言っても男性とどこも違わないと思いますが、やはり女性次官と言われるじゃないですか。今はまだ珍しいからですね。もう10年後には女性次官という言葉はなくなるように祈っているのですが、だから、そのような意味ではなくぐらなければいけない時期でもある。ただ、そういうマイナスの面をどれだけ実害のないようにやっていくかということと、レッテル貼りをされたらされたで、そのプラス面のところはうまく使っちゃえと。私なんかはそのように思う部分もあります。あとは真面目な議論として、なぜ女性を次官にするのかを考えて、女性でも男性でも能力がある人であれば霞ヶ関の中できちんと使っていけるねとか、生活感覚のある人間がもっと霞ヶ関に増えるといいねということを周囲に認めてもらうのが大事なことで、だからその大事な部分をきちんとやることを忘れなければ、途中のところをどのようにかわして実害がないようにくぐり抜けていくかということになるのかなと思っていま



す。

○今中 確かにそういうことも考えられますが、インカーブのアーティストの方々は何かレッテルを貼られたときに抵抗することができるかとも考えます。たぶん、できにくいでしょう。彼ら自身が抗弁することは、中にはできる方もいらっしゃいますが、ほとんどはそうではない。そのことを身近にいる僕たち黒子がわかっておかなければならないと思います。

アール・ブリュットという言葉をめぐる今の動きはあまりにも急進的ですし、元々の歴史的な定義を外したような使い方をしていくのは危険だと思います。それに僕は、福祉の関係者がこれを先導していったというのは違和感がありますね。もし、障がい者の作品をアール・ブリュットだと美術関係者が言ってくれたのであれば、今のような盛り上がりはなかったと思います。福祉の、何というのかな、僕は苦手やけど、わぁっと進めていく圧力というのが日本の福祉業界にはあって、アール・ブリュットという言葉で発信してぐいぐい進めていく状況というのは少し危険だなど、

個人的には思っています。

○村木 危険、自分の美学においてはあまり美しくないという感覚は、私はすごく大事だと思いますね。いろいろなやり方があるから、戦術としてはいろいろなことが動いている。だけどやはり本質のところを見失わないということと、もう一つは今中さんが言ったように、いつも今中さんはご本人の側、アーティストの側に立って物事を見ている。それってすごく大事なことだし、もっと言えば福祉の本質的なところだと思うのです。

ご本人がアートということを職業にして才能を開花させていく。そのために何が必要なかを、本人に代わって大きな声で発信していくことをやり続けるというところに何となく答えがあるのではないですか。レッテルを貼られるのは嫌だと思っている人がいれば、その気持ちを誰かが代弁していかなければいけませんね。

#### それぞれの立場で取り組むことこそ

○今中 そうですね。では次に“すべては人”というキーワード、これも国の議論の

中に出てきたことですし、僕は講演させていただくときにいつもお話します。これはスタッフの話で、この分野を理解する人をいかに育てていくのかというのは、遠回りのようで実は近道だと思うし、さっき話していた混沌を整理整頓していくのは次の時代の方々だろうという気がしています。僕の世代では無理というか、もう少し先、あと10年とかではなくて20年後、30年後を考えていくことがポイントになるでしょう。具体的に言えば、今の大学生たちにこの分野に関心をもってもらえるか。

インカープはここ10年間、金沢美術工芸大学で授業をさせていただいてまして、今日も関係者が金沢から来てくれていると思います。金沢でインカープの活動を紹介して、関心をもってくれる学生がいたらインターンとして来てもらったり、そのままスタッフになった人もいます。とてもいい出会いがたくさんあったんですが、インカープみたいな小さな施設の取り組みでは全体状況を変えるまでにはなりません。

ところが、実は勉強不足で知らなかったのですが、2008年ぐらいから東京藝術大学



が学生を東京都内の支援学校に派遣しています。そんな取り組みを東京藝術大学は地道に続けていらっしゃるということを知りました。

2つの国の懇談会でも、学生を育てることが重要だ、そのためには厚生労働省だけではなくて文部科学省と文化庁が連携することが必要だと言いつけてきました。夢みみたいなことを僕は5年間ぐらいつつと言いつけてきて、本当に力がなくて全然前に進まなかったのですが、ようやく来年度、国公立の2つの芸術系大学が手を挙げてくださって、支援学校やインカープのようなアート系の福祉施設でアーティストをサポートする学生を育てようという取り組みが始まりそうです。この事業はまだ正式に採択されていないので、今は学校名も言えません。キーマンがいらっしゃるおかげで実現しそうなんです。やはり常に“人”だと思いますね。こうした取り組みを推進するには、今後さらに厚生労働省と文化系の省庁の連携が欠かせないと思いますが、厚生労働省のバックアップの仕方は今、どのようになっていますか。

○村木 この分野は厚生労働省の中でも、働いて収入を得るという労働の部分と、基礎となる暮らしの部分を一緒にやらないと駄目だと思うのです。労働と暮らしの両方を見据えてどのように支援するか、検討して政策に反映させていくことが、われわれ厚生労働省の仕事だと思っています。

先ほど、アート活動をする環境が弱い、混沌としているという話がありましたね。経済的にも課題があると。私はアート活動で生計を立てていく人の数というのはそんなに多くならないだろうと思っていて、それは障がいの有無に関わらず、同じぐらいの割合になるんじゃないでしょうか。それと、裾野のところにいる人々への支援と、頂上のところにいる人々への支援というの

は、まったく質が違う。これまで、アーティストに対してアートの部分の支援は行政にありましたが、その人の暮らしや、その活動をする際に障がいがあるがゆえにできない部分をサポートするというは、残念ながら今までの行政の中にはありませんでした。だから、これから初めて取り組んでいくわけですが、何が必要でどうすればいいのかということ、やはり現状に沿ってつかんでいかなければいけない。そのプロセスにこれから入るのかなというところですね。せっかく芸術系大学が動いて、インカーブのような施設もあって、他にも独自の取り組みをされているところがあるので、本当に行政が支援しなければいけないことは何か、どのような仕組みが必要か、どのぐらいの量なのか、といったことを検討していく。先ほどおっしゃったように芸術系大学で新しい試みが始まるのなら、役所の人間と一緒にプロセスに関わっていくところから、まずやるのが重要でしょう。

○今中 それはぜひお願いしたいと思っています。さっきお話しした2つの芸術系大学の試みが成果を挙げて全国に広がっていけば、という希望も持っています。今、国公立の芸術系大学は全国に5つ、東京、愛知、金沢、京都、沖縄にありまして、その大学と大学の近辺にある支援学校や福祉施設が一体になって活動していけば、何かまた新しい活動ができるような気がするんです。先ほど言った定義の問題、混沌としているものが、学生の中から志のある方が現れて整理していく。ずいぶん時間がかかりそうですが、でも未来はとても明るいと思っていますので、ぜひ文化系の施策に厚生労働省がバックアップしていただきたいと思います。

○村木 最近思うのは、福祉だけでなく医療の世界などでも、新しいことや面白いことが始まる時、結構そこに畑違いの人が

加わっているなど。まったく関係なかったはずの人たちが出会ったときに何かが始まるということをしごくよく見聞きます。だから、これは面白いと思って動き始める人が何人か、本気で動く人が何人か現れば、案外早く物事は動いていくかもしれません。

### 自力と他力による“自立”

○今中 ぜひ、そうなるようにと思いますね。対談の予定時間が残り3分になりました。すべてのキーワードに沿って、ということができずにすみません。最後は“迷ったら原点に”。これは村木さんがBS放送の番組に出演されたときに話された言葉で、僕も同じことを、何かに迷ったら原点に戻ろうというも思うのです。

インカーブは小さな所帯だからできるのかもしれませんが、何か問題が生じたときにはスタッフ全員でお茶を飲みながら、これはどう思う、どう解決していこうかということをお話し合っています。最年少のスタッフは24歳ぐらい、30代、40代のスタッフがそれぞれ意見を出し合って、最後は僕が決を採らせてもらうのですが、話し合うとき原点になるのは、アーティストは幸せか、アーティストはそれでOKと言えるかどうかということです。たとえばある展覧会のオファーが来たとき、そこに出品するのは本当にいいことか。もし出品するとなると、スタッフの労力が相当かかります。でも、アーティストが喜んでくれるなら、言葉では気持ちを伝えてくれないとしても、アーティストの笑顔が増えるなら出品しようと、その判断基準を見失わないようにすることが原点としてありますね。

村木さんはお仕事を含めて、原点というのはどのようなところになりますか。

○村木 私自身は“働く”ということをしてテーマにして仕事をスタートしたので、そ

の人が持っている力を外に出せるようにしていくことですね。人によってできることは全然違いますが、一人ひとりが自らの力を最大限発揮できるようにする。とくに女性や障がい者の問題に関わっていると、できないと思われて可能性をふさがれている状況を、どうすれば開けるのかを考えます。可能性が開かれたときの喜びというのはすごく大きくて、自己肯定感というか自分に自信をもてる、そのプロセスをすごく大事にしたい。それが私の原点だったのですが、少し前にもう一つ原点が加わりました。ちょっとした事件があったものですから。

事件があったときに思ったのは、仕事をきちんとやっている、自分の力で暮らしていると思っていた私が……そう言えば、今日の会場は大阪ですよ。大阪の都島の辺りにしばらく閉じ込められましたので、自分では何もできなくなりました。どのようにして自分の無実を証明していくのか。どのようにして裁判に勝つのか。何もわからないですから、家族の力を借り、友人の力を借り、そしてプロの弁護士の力を借りなければならぬ。ああ、そうか。偉そうに自分で自立していると何となく思い込んでいたけれど、本当に一夜にして私は助けしてもらわなければいけない立場になったのだと。

そして、何にもできない状況になることが自分にもあるのだとわかって、自分の力を発揮していろいろなことをしていくということと、何にもできない状況になったときには周りが助けるといった仕組みをつくっていくこと、ちょうど正反対の原点みたいなものを、これまでの仕事とこの前の事件から学びました。できる力を活かすということと、できないことがあれば助けをもらうという、この2つの原点を大事にしたいなと思っています。

○今中 その事件のとき、いろいろな場所へ村木さんに会いに行きました。大阪裁判所に行ったのも初めてだし、桜が咲いている拘置所に行ったのも初めてだし、初めてづくしだったのですが、すごく記憶に残っているのは、初めて交渉してアイスキャンディーを差し入れてくれとおっしゃったのです。その年は夏がとっても暑かったから、キャンディーが食べたいのかなど。それで持っていても、食べない。脇の下と膝にキャンディーを挟んでおられるんです。そのくらい暑かったですね。そのときに僕たちの間にはガラス、強化ガラスか何かわかりませんが……。

○村木 アクリル板がありましたね、そう、そう。

○今中 今は笑えますが……あのときはまだ判決がどうなるかわからない頃で、村木さんはそのときも今と変わらないような笑顔と雰囲気です。僕らが帰るときに「それじゃあ」と言って別れるとこちらの方が打ちひしがれていたという感じでした。村木さんを助けたい、支えたいと周囲が思うのは、やはり人徳だと思います。当時、村木さんを本当に助けたいと全国の障がい者関係の方々がたくさん応援に来られていたので、それは今まで村木さんがこの分野で真面目にやってきたからだと、僕はよくわかりました。

○村木 いろいろな方に応援してもらって本当にお世話になったときに思ったのは、今中さんをはじめとして、この分野の人は人が好きなんだなと。悪いことをして捕まって塀の向こうにいる役人のところにわざわざ会いに来るなんていうことをしてくれるのは、やはり関わった人をなんとかしてあげたいと思ってくださるから。この分野の人は人が好きなんだな、本当に非常にありがたいと思いましたね。

○今中 村木さんが好きだから、人が集

まってくるのだと思います。

○**村木** ついでに言うと、大阪の方には本当にお世話になりました。都島に閉じ込められていたときは大阪の方に触れ合う機会はなかったのですが、保釈後に裁判のため大阪へ来たらキオスクのおばちゃんとかタクシーの運転手さん、飲み屋のおじさまとか、いろいろな人に声を掛けてもらって本当にお世話になりました。ありがとうございました。

○**今中** ありがとうございました。予定の時間より5分ほどオーバーしてしまいました。第一部はアートそのものというより、支援の方向性や少し大きなフレームづくりのお話をさせていただきました。アート市場、障がい者施策などの詳細は第二部で皆さんが議論されると思います。それでは第一部はここまでです。ありがとうございました。

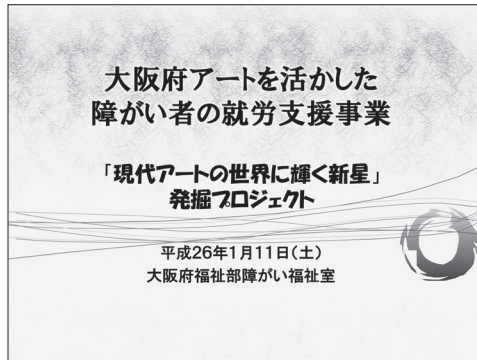
○**村木** ありがとうございました。

○**司会** 村木さま、今中さま、大変有意義なお話をしてくださり、どうもありがとうございました。では、ここで休憩に入ります。3時にはご着席いただきますよう、よろしく願いいたします。

## 大阪府からの事業説明

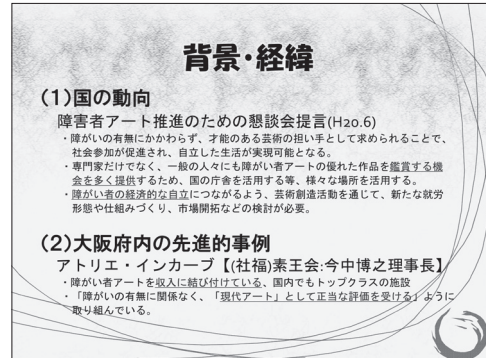
西口 禎二（大阪府福祉部障がい福祉室自立支援課長）

○司会 これからパネルディスカッションを行い、大阪府の“アートを活かした障がい者の就労支援事業”の課題と展望についてディスカッションをしていただくわけですが、まず大阪府からこの事業について説明いたします。説明は大阪府福祉部障がい福祉室自立支援課長の西口禎二が行います。



○西口 皆さん、こんにちは。西口でございます。私の方から大阪府が取り組んでおります事業について説明させていただきます。正面のスクリーンに映しているものを、資料としてペーパーでもお配りしておりますので、そちらをご覧ください結構かと思えます。

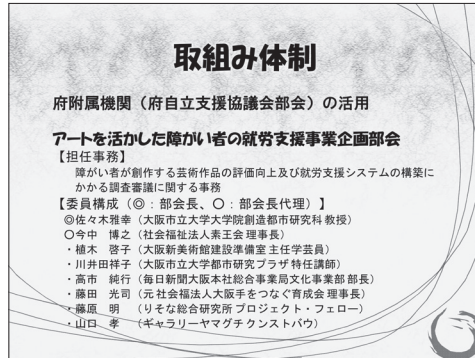
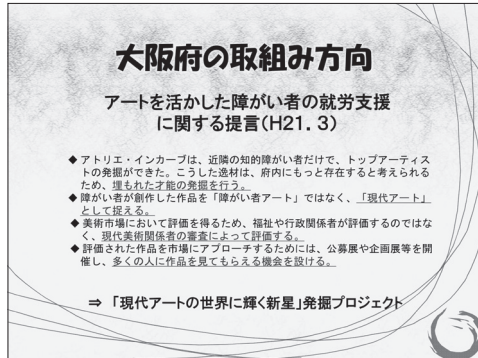
まず、本日説明させていただく項目を挙げています。背景・経緯、大阪府の取組み方向、取組み体制、具体的な取り組みの内容、それから来場者からの反応、これはアンケート結果からですね。それと最後に、今後の取組みに向けてということで課題等を説明させていただきます。



それではまず、背景・経緯についてでございますが、ここにつきましては先ほどすでに今中さんからかなり詳細に説明していただいたので、一部カットして説明させていただきます。1番目に国の動向として、「障害者アート推進のための懇談会提言」とあります。その内容として3つ、いわゆる障がい者アートを推進することの意義、鑑賞する機会を多く提供する必要があるということ、障がい者の経済的な自立につながるよう新たな就労形態や仕組みづくり、市場開拓などの検討が必要だということが提言されております。

そして2番目に大阪府内の先進的な事例、これもすでに皆さんご承知のように、アトリエ インカーブの取り組みを先進的事例として挙げています。アトリエ インカーブにおきましては、利用者をアーティストと呼び、収入を得て自立することを目的にされています。先ほど今中さんのお話にもありましたように、アーティストの中には数百万円という価格のついた作品を制作される方もおられます。また、現代アートとして正当な評価を受けるように取り組んでおられます。



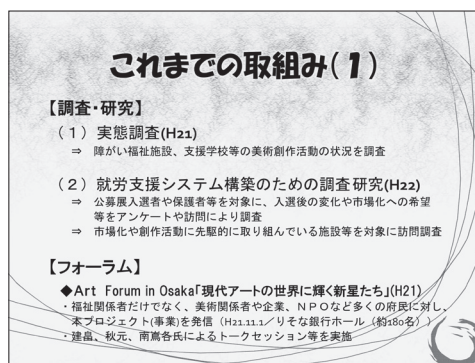


次のスライドは大阪府の取組み方向です。大阪府では平成20年度、本日のモデレーターである佐々木先生をはじめ、ゲストの今中さま、藤原さま、山口さまを含め11名の有識者の方々に参画いただき、「アートを活かした障がい者の就労支援懇話会」というものを設置して、障がい者の方の就労支援をするにはどのようなことができるか、そのような観点から種々議論を積み重ねて平成21年3月に提言書を提出いただきました。

提言のポイントは4つあります。埋もれた才能の発掘を行う、現代アートとして捉える、現代美術関係者の審査によって評価する、多くの人に作品を見てもらえる機会を設ける、こうした4つのことが必要だということです。そして、現代美術としての評価を受けた作品を市場につなげていく仕組みをどのようにつくっていくか。新たな仕組みの構築ということが今まさに求められているのではないかと考えておりますし、現在もこの提言を基にいたしまして、「現代アートの世界に輝く新星」発掘プロジェクトと銘打って事業を展開しているところでございます。

次に、取組み体制と書いております。「アートを活かした障がい者の就労支援事業企画部会」という大阪府の附属機関がございます。この企画部会の先生方から、さまざまなご意見をいただきながら取り組みを進めているところでございます。これをご覧になっておわかりのように、委員には今日、モデレーターをしていただいている佐々木先生をはじめパネラーの皆さんにも参画していただいております。

次から3枚のスライドは、これまでの取り組みについて説明させていただきます。



まず、調査・研究です。平成21年度と22年度、いずれも大阪市立大学都市研究プラザの協力を得て実施しております。21年度は大阪府内の福祉施設等を対象に実態調査を行いました。アンケートを採りまして、アンケートに回答のあった施設のうち約3分の2でなんらかのアート活動が行わ

れていることがわかりました。翌22年度には新たな仕組み構築のためのデータ収集として、公募展が作者にもたらした成果であるとか、あるいは作者へ収益を還元するための契約手続の代行、著作権等の権利擁護などについて調査を行いました。

また、平成21年度には今日と同じ会場で「現代アートの世界に輝く新星たち」と題するフォーラムを開催しています。前半にはトークセッション「現代アートの新たな視点」というテーマで、日本を代表する現代美術の専門家でございます3名、当時は国立国際美術館館長をされていた建島哲先生、金沢21世紀美術館館長の秋元雄史先生、そして今日もパネラーをお願いしております美術評論家の南畷宏先生にお話していただきました。そして、資料には書いておりませんが、後半にシンポジウム「アートが拓く障がい者の可能性～公民協働による支援システムの構築に向けて」を同時に行っております。

**これまでの取組み(2)**

【公募展】

- ◆第1回
  - ・応募作品 791点 ⇒ 入選作品 68点を展示
  - ・H22.3.9～25/府立現代美術館 C (約3,500名)
- ◆第2回 (副題:「感性の王国～完全なる自由へ～」)
  - ・応募作品 720点 ⇒ 入選作品 59点を展示
  - ・優秀賞作者2名によるライブペインティング実施
  - ・H25.3.5～17/府立江之子島文化芸術創造 C (約1,500名)

※審査員(2次審査/第1回、第2回とも同じ)

- ・建島 哲 氏 (京都市立芸術大学学長)
- ・秋元 雄史 氏 (金沢21世紀美術館館長)
- ・南畷 宏 氏 (女子美術大学教授)

次に取り組みの2つ目でございますが、これまでに2回の公募展を開催しております。いずれも応募作品が700点を超えるということで、障がいのある方々の期待の高さが伺えると思います。スライドの下の方に審査員のお名前を書かせていただいております。一次審査は作品の写真を見て行い、二次審査では先ほどフォーラムのところで

ご紹介した3名の先生方に実際の作品を見ていただき入選作品を選んでいただいております。

第2回公募展につきましては「感性の王国～完全なる自由へ～」という副題を付けてまして、優秀賞受賞者によるライブペインティングも実施しました。その際、ライブペインティングを実施された当事者の方はトイレへ行くことも忘れるほど集中して描いていたことが大変印象的でした。また、第2回の公募展におきましては、本日のテーマでございます「アート市場への挑戦」ということにも気を配りまして、作者の了解の下で展示作品の販売も可能といたしましたところ6点の引き合いがあり、うち3点が契約にまで至りました。

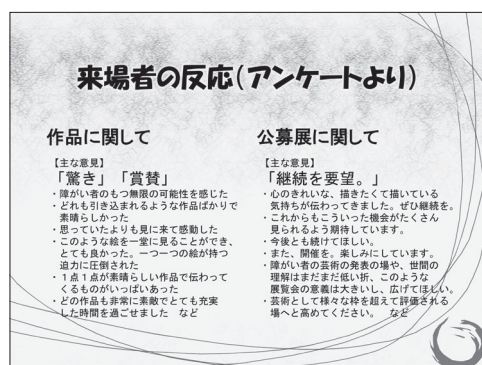
**これまでの取組み(3)**

【企画展】

- ◆現代アートの世界に輝く新星展 in CASO
  - ・第1回公募展入選作品 (66点) を展示
  - ・建島哲氏とおかけんた氏 (よしもとクリエイティブ・エージェンシー) によるギャラリートークショー開催 (3.12)
  - ・H23.3.8～13/海岸通りギャラリーCASO (約500名)
- ◆透明な画才～進化する4つの個性～
  - ・第1回公募展優秀賞作者4名の作品 (21点) を展示
  - ・ライブペインティング、ギャラリートークショー実施 (2.25)
  - ・H24.2.21～28/堂島リバーフォーラム (約500名)

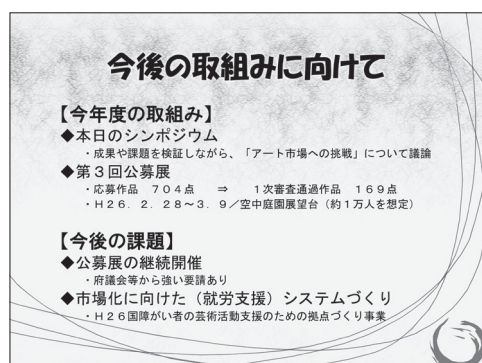
また、企画展も行っています。企画展すなわち展覧会をこれまでに2回実施しております。平成23年3月に行った企画展では、建島先生とよしもとクリエイティブ・エージェンシーのおかけんた氏によるギャラリートークも実施しました。その後、平成24年2月には「透明な画才～進化する4つの個性～」というタイトルの企画展を行いました。そのときは先ほどの対談でも出ていた「山高ければ裾広し」ということを意識して、1回目の公募展で優秀賞を受賞された4名の作品を展示しました。来場者の方のアンケートでも「購入したい作品が

あった」という回答を約3割の方からいただきました。この数字が高いかどうかについては、この後のパネルディスカッションに評価を委ねたいと思います。



次のスライドでは、公募展あるいは企画展を開催した際に来場者の方からいただいたアンケートを少し紹介しています。作品に関しては、「無限の可能性を感じた」「一つ一つの絵が持つ迫力に圧倒された」など、驚きや賞賛の声が圧倒的でした。

公募展に関しては継続の要望が非常に多くありました。また、継続だけではなく、市場化も含めた次のステップへ発展させてほしいといった声も多くございます。



次に今後の取り組みについてでございます。今年度の取り組みとしては本日のシンポジウムに加えまして、平成26年2月28日から3月9までの10日間、第3回の公募展

を開催する予定です。より多くの方々に見ていただきたいという思いで、梅田スカイビルの空中庭園展望台で開催するよう準備を進めております。

現在の応募状況は今回704点、一次審査で169点に絞り込みまして、今月20日には二次審査で入選作品を選んでいただきます。今回の審査員も過去2回と同様の3名の先生方をお願いしているところでございます。

最後に、今後の課題ということですが、アンケートからも明らかなように公募展の継続開催、これはしっかり取り組んでいきたいと考えております。2つ目の課題、これはパネルディスカッションのメインテーマとしても議論いただきたいと思っておりますが、市場化に向けた就労支援システムの取り組みが大きな課題であると考えております。

平成26年度の国の予算に、障がい者の芸術活動支援のための拠点づくり事業も盛り込まれるとお聞きしております。そうした国の動向も見据えつつ、大阪府の事業をさらに発展させていくためにも、この後のパネルディスカッションで指針となるようなご意見を頂戴したいと考えております。パネラーの皆様方には活発なご議論をよろしくお願いいたします。

## パネルディスカッション

### 「大阪府の“アートを活かした障がい者の就労支援事業”の課題と展望」

パネリスト（\*50音順、肩書きは開催当時のもの）：

笠谷 圭見（PR-y主宰／RISSI INC. 取締役副社長）

藤原 明（りそな総合研究所 プロジェクト・フェロー／りそな銀行大阪地域イン  
フォメーションオフィサー、法人ソリューション営業部アドバイザー）

南 宏（美術評論家／女子美術大学教授／武蔵野美術大学客員教授）

山口 孝（ギャラリーヤマグチ クンストバウ代表／ART OSAKA相談役）

コメンテーター：

村木 厚子（厚生労働事務次官）

今中 博之（社会福祉法人 素王会 理事長／アトリエ インカーブ クリエイティブディレクター）

モデレーター：

佐々木 雅幸（大阪市立大学都市研究プラザ所長／同大学教授）

\*敬称略

#### 尊厳の回復としての表現

○司会 それでは、パネルディスカッションに移ります。最初に、皆さまから向かって右側のテーブルにお座りの4人のパネリストの方々をご紹介します。左から、PR-y（プライ）というプロジェクトを主宰されている株式会社RISSI（リッシ）取締役副社長の笠谷圭見さま、りそな総合研究所プロジェクト・フェローの藤原明さま、美術評論家で女子美術大学教授の南 宏さま、ギャラリーヤマグチ クンストバウ代表でART OSAKAの相談役もされている山口孝さまです。次に左側のテーブルに座られているのは、先ほど登壇された村木厚子さまと今中博之さま、お二人にはコメンテーターとして参加していただきます。そして一番左側、本日のモデレーターを務める大阪市立大学都市研究プラザ所長の佐々木雅幸教授です。皆さまの詳しいプロフィールはお手元のプログラムにも記載しておりますので併せてご覧ください。

これからの進行はモデレーターの佐々木先生をお願いいたします。

○佐々木 皆さんこんにちは。佐々木でございます。実は、私は今中さんに初めてお会いした6年前か7年前まで、障がい者アートについてほとんど知りませんでしたし



た。先ほど対談の中で、門外漢がいたほうが面白くなるという話がありましたが、私自身は魅力に取りつかれてこの分野にどんどん引き込

まれております。

ところで、インカーブというのは野球の用語で、野球をやったことがある人はわかると思いますが、インカーブの球が来ればほとんどのバッターはのけぞります。きゅっと曲がってくるので、自分のところらぶつつかってくるような気がするんですね。そんな球を打つにはどうしたらいいか。私は今日、障がい者アートという非常に尖った試みを今後どうしていったらいいか、4人のパネリストの方々に教えてもらおうと思ってモデレーターを引き受けた次第です。

トップバッターとして、まず南 宏さんからお話を伺いたと思います。南 宏さんは熊本市現代美術館の2代目館長を務められた方で、大阪府の公募展の審査員も最初から引き受けてくださっています。先ほどの対談の感想や、あるいは審査員として関わってこられての感想などからお話を伺ってみたいと思います。よろしくお願いま



す。

○南 眞 まず、先ほどの村木さんと今中さんのお話は大変興味深く、そして人間味のあふれるお話を、興味深く拝聴いたしました。今回の



テーマはアート市場への挑戦ということで、かなり限定されたタイトルが付いているわけですが、私たちがここで見誤ってはいけないのは、障がい者の方々が描いた絵がどんどん売れるような社会づくりをしようということではないということなのです。

村木さんが最初に今中さんに、あなたにとって金平糖の核になったものは何だったのということを質問されました。そのときに今中さんはかなり照れて言葉を選びながら答えられたと僕は思ったのです。根底には復讐というような面があったと思います。復讐は、とても強い言葉です。だけど後半で村木さんが大阪地検のことを少し触れられた。そのときにたぶん彼女がいちば

ん失ったもの、傷つけられたものは彼女の尊厳だったと思います。

つまり今中さんは障がいを持って生まれてこられた。そしていろいろな仕事をされています。1級建築士としても、社会福祉法人の長としてもお仕事をされながら、今はインカーブという施設を運営している。彼がどう生きてきたかと言えば、彼自身はそのような下品な言葉では言わないかもしれないですが、彼は自分の尊厳を傷つけられた状況をいかに打開するかということを考え続けてきた男だと思って、僕は彼とすごく親しくさせてもらってきたのです。こんなことは彼に言ったことはないです。でも、僕はずっとそのことを自分に突き刺す彼からのメッセージだということで受け止めてきました。

今日のテーマである「アート市場への挑戦」という、システムをつくったり環境を整えたりしていくことは、実はそんなに難しいことではないと思っています。たとえば、今日お越しの皆さんの中で、これまでに障がい者の方々が描いた絵を実際に買ったことはありますか？ たぶん、あま

りおられませんね。でも、自分で気に入った絵があれば買えばいいだけのことなのです。

そんなに難しいことではない。しかし、その一つ一つの作品の奥にあるものは、一人ひとりの障がいを持つ方々の、それは意識的であるか無意識であるかわからないですが、その方の尊厳を表したものであるということを前提として作品を受け止めなければ、それを経済化、あるいは資本主義社会のシステムに取り入れていくというときに、私たちは重大な見誤りをしてしまうのだと思います。

大阪府がその経済難の中にあっても、この事業を推進してこられたということは心から敬意を表したいと思うわけです。そして、お声掛けをいただいて僕も審査をすることで、この現代アートの世界に輝く新星発掘プロジェクトという展覧会に関わらせていただいて、毎回、本当にある種の救済を得るような経験を積み重ねてまいりました。それはやはり、前提として申し上げたような、それぞれの尊厳の形が表れているからなのです。審査の後で私は毎回、その中から何点かを本当に安くして申し訳ないのですが、常に購入させてもらっております。そうして自分の小さなコレクションを増やしつつあるというところが、このプロジェクトに関する私の関わりです。

先ほど佐々木先生から熊本市現代美術館のことを言っていました。館長を引き受けるまでの私は、実は熊本へ行ったことがなかったんですが、縁もゆかりもなかった熊本で現代美術館をつくってくれという依頼があり、お引き受けすることにしました。その熊本での経験において美術そのもの、アートそのものの見直しをさせられるような経験を与えられました。熊本には菊池恵楓園という日本で一番大きなハンセン病の国立療養所があり、入所されてい

る皆さんとお付き合いさせていただきました。菊池恵楓園だけでなく、全国にある13の国立療養所と韓国のソロクト更生園、それから台湾の台北県新莊市にある療養院、そのようなハンセン病の療養所を巡りながら、ある種の差別、隔離という絶対差別の状況下を耐え抜いてきた方々の絵を通して、絵とはいったい何か、神様がなぜ人間に絵を描くことを与えたのかを考えました。そして一つの答えを、その状況に置かれていた人たちがわずかな光の中で描いてきた絵、あるいは創ってきた作品から教えられました。

今中さんはあえて強く言わず、抑えた発言をされていますけれども、その奥にある思いみたいなものと、私自身の経験が重なり合ったのかも知れません。

あまり長くしゃべってはいけませんが、もう少しだけ。たとえばアベノミクスで戦後最大の予算が付いた。その中で、村木さんが担当されているセクションではどのぐらいこの分野に対して前年比の割合が上がったのか。文化庁の話も出てきましたが、現在の文化庁長官は青柳正規先生で、実は私の恩師であります。まだ就任したばかりなので青柳長官が今回の予算配分に携わったわけではないでしょうが、アベノミクスという大きな動きの中で、国家予算にどのように反映させていくか、まさに現実の問題としても私たちが注視していかなければ、要求していかなければならないと考えています。

また、大阪府の府庁舎の全フロアには障がい者の皆さんの絵がいつも掲げられているように、部長や課長はポケットマネーで絵を買きましょう。そのようなささやかなところ、いや、けっしてささやかではなく、大きく変わっていくことにつながります。本当にできることはたくさんあるはずですが、なぜ、やらないか。一人ひとりが自分

事として考えることが重要ではないでしょうか。

そしてもう一つの大事なこと、アート市場へ参入するという事は大きな落とし穴かもしれないということです。つまり資本主義というのはいくらも残酷な形で差別が表れるものです。売れる、売れないがはっきりしている。これまで障がいを持っているがゆえに受けてきた差別と、作品が売れないという差別、この2つを負わせることになるかもしれないという覚悟をもってアート市場へ参入していくのだということを、最初に少し申し上げておきたいと思います。

### 「大阪モデル」の構築を

○佐々木 いきなり剛速球がきましたね。これは私の作戦どおりで、この剛速球をどうやって打ち返すかということが次の3人に期待されるわけですが、実は主催団体の一つである大阪府は大変な財政危機でありまして、このような事業を継続するにあたってゼロ円という予算が計上されているので私は驚きました。項目だけ、主要事業という位置づけであっても予算はゼロ円。ゼロ円でここ数年続けてきたのは本当にすごいです。その秘訣の一つは委員の皆さんの熱意です。今日もこういう立派な会場をお借りしていますが、やはりそな銀行のご厚意によって無料で使わせていただいています。

そういうふうには、いろいろな形の支援が民間や個人からあって、その熱意でこの事業は継続してしまっていて、「大阪モデル」と言うのがカッコいい感じもしますが、どうでしょうね。藤原さん、いかがですか。

○藤原 りそな総合研究所の藤原でございます。よろしくお願ひいたします。私は地域の活性化に関する取り組みを、大阪を中心に展開しているのですが、先ほど佐々木



さんがおっしゃったように、できるだけお金をかけない形の方法や仕組みをつくることを心掛けています。なぜかと申しますと、企業は経済

状況が悪くなると、思いはあってもなかなかお金を出せないという状況に陥りやすい。どんなに社会的価値のある事業であっても、お金がないなら止めてしまおうといったことになりがちです。

ある事業を支えていくには、もっともっと広い裾野づくりが必要で、私は資金確保のポイントは小口分散化だと思います。たとえば大阪に天満天神繁昌亭という落語の小屋があるのですが、ここは有志の方々が1口1万円という形で出資して2億円以上が集まり建設されました。最初は絶対に集まらないと言われていたのですが、いろいろな方々の熱意がどんどん広がり、それが大きな形になってムーブメントになり、さらに自分も関わっていきいたいという人が現れました。そのような気持ちをいかに引き起こすかということが大事です。私どもは銀行グループですので、数多くの企業や個人のお客さまとのリレーションがあります。この方々を巻き込んでいくということで、お役に立てるのではないかと考えています。

たとえば今回のシンポジウムのような告知に関しましても、インターネットバンキングをご契約いただいているお客さまにメールを配信させていただきますと、これまであまりこの大阪府の事業について知らない方にも知っていただき、ご来場いただきました。そういう一つのきっかけづくりをしていくことも役割として重要ではないでしょうか。

今回のシンポジウムのタイトルは、

「アート市場への挑戦——障がい者の芸術表現の可能性」とあります。大阪府の事業には私も委員として参加させていただいていますが、このシンポジウムのタイトルに込められた意味を少し考えてみたいと思います。私はこの事業についてはもっと世に問うべきだと考えております。この事業がどのようなものなのか、まず広く知っていただくということ、そして、さまざまな立場の方々に考えていただくことが必要だと思っております。今回のシンポジウムも、世に問うための一つの形だと思っておりますが、この事業について多くの方々に考えていただき、熱量を上げるきっかけにすることが必要です。

そして最終的な目標が、アート市場への挑戦を実現するという事です。

私は以前、今中さんに尋ねたことがあるのですが、日本各地でアウトサイダー・アートの展覧会の開催など、いろいろな取り組みもあるが、残念ながら日本では、アウトサイダー・アートはマーケット的にはまだまだ成熟していない。ところが、海外で評価されると日本へ逆輸入される場合もあると聞きます。ただし、残念ながら海外で紹介するチャンスが少ない。では、海外紹介の費用はいったいいくらぐらいかかりますか？とお伺いすると、1作品につき約200万円というお答をいただきました。せっかくこのような事業を継続し、公募展も行い、優秀作品も選んでいる。しかし、優秀作品を海外で紹介してみようという動きは、残念ながらこの数年間の取り組みの中ではまだないのです。世に問うということは、海外への紹介も含めてのことだと思いますし、そこでの反響が熱量を上げるきっかけになるのではないかと考えています。

私としてはぜひとも大阪府の今年度の優秀作品につきましては1作品でもいいので、海外向けに発信をして、その方がイチ

ローになるのかどうかを見極めたいと思いますし、そのプロセスを皆さん方で支えていくという体制もつくりたい。200万円が必要なら、たとえば今日400人の方がお集まりですので、皆さんが賛同してくださるならお一方5,000円です。このシンポジウムでなくても、たとえば趣旨に賛同していただける方が集まるようなイベントを実施するという事も考えられます。我々は実はこの会場を使って、毎月若手音楽家の活躍の場を創ろう！ということで、クラシック・コンサートを年間6回程度開催しております。たとえば、その来場者に、このようなアート市場への挑戦！という取り組みがあるということをしっかり説明して、実際に作品の海外紹介のためのお金を集めてみて、今日はここまで集まりました、もう少しで実現できるのですということを地道に伝えていってもいいのではないかなあと考えています。支援の裾野を広げ、うまくファンディングし、優秀作品を海外で紹介していくという「大阪モデル」をつくり上げたいというのが私の思いです。ありがとうございました。

### アート市場の現状

○佐々木 とても具体的なお話をいただきました。それぞれの立場で、一人ひとりができることによって支えていただくということが大切ですね。では、3番目は山口さんにお話をいただきます。山口さんはギャラリーを運営されておられて、文字どおりアート市場に関するプロでいらっしゃいます。ただ、このアート市場というのはバブルの時期は高額の商品が飛ぶように売れたわけですが、その後は非常に苦況に立っている。また、一般の市民が自分の家で鑑賞するために絵を買うという習慣がなかなか育っていません。山口さんにそのような日本のアート市場の特徴をふまえてお話を



いただけるとありがたいです。よろしくお  
願います。

○山口 私も大阪府  
の事業に最初から関  
わっておりまして、  
他の委員の皆さんの  
意見を伺いながら考  
えさせられることが  
たくさんあります。



まず、現代アートというジャンルがありま  
す。これについての捉え方は多様ですし、  
僕のような市場に関わる仕事をしている者  
にとっても、あやふやな言葉ではあるので  
す。ただ一つ言えることは、今を生きる  
人たちが生きている証しとして表現して  
いるものが現代アートであるという、その  
ようなジャンルだと僕は考えています。そ  
の中には、今、生きて制作しているとい  
うことは、かなり挑戦的な表現が多いとい  
うことが根底にあるわけです。たとえば何  
年か前のものを、その同じような表現で  
今を表現したものは創造ではない。そう  
ではなく、創造的に挑戦的な美術をや  
っている人、また、それを総称して現代  
アートという括りで捉えると、市場は  
はっきり言ってゼロ、市場はない。挑  
戦的なものに対して対価を払う人は  
まったくないということが、現代  
アートの現実であったわけです。

先ほど佐々木先生がおっしゃったバブル  
の時期、1990年前後の頃はかなり潤沢に  
利潤の出た時代があったわけですが、  
その当時に取り引きされたのは現代  
美術、現代アートではないです。取り  
引きのほとんどが、過去に価値を認  
められた作品でした。ただ、そうした  
状況の中で、美術館ブームという  
ものが行政サイドでありまして、美  
術館が各地で建設されていったとき  
に、現代アートを入れようではないか  
と考える学芸員の方がいらっしや  
って、そのような方が美術館に現代  
アートの作品をコレクショ

ンしたという事実はあります。南  
郷さんがおられた熊本市現代美術  
館もそうですね。あと、わずかな  
がらプライベート・コレクターと  
おっしゃる方が買っておられた。  
現代アートの作品をコレクション  
された。しかし、はっきり言って、  
市場をつくろうという規模では  
なかったわけです。そして今は、  
市場は財政的にまったく静かな  
状況なので、より厳しくなってい  
ます。

そのような状況を抱えていても、  
芸術系大学では今なお、アー  
ティストを目指す人たちがいて  
作品を創っているけれども、実  
際に市場としては動かない。一  
方、そのような現状であっても  
障がい者の作品を現代アート  
として世界で発表していこう、  
市場をつくっていこうよという  
取り組みは、まさに僕自身にも  
共感する部分があります。それ  
は障がい者アートだからという  
問題ではなくて、現代アート  
そのものが抱えた問題だと考  
えて、ずっと取り組んできました  
し、僕の中では差別化という  
ものはないのです。作品を見  
ていい悪いという自分の感性  
としての評価はありますが、  
作家が障がいを持っているか  
どうかの評価ではありません。

それから、私は2002年にART  
OSAKAというアートフェア、  
現代美術だけに特化したア  
ートフェアを立ち上げました。  
その理由は先ほど申しました  
とおり、状況が変わるように、  
現代美術というものをもう少  
し理解してもらって市場に乗  
るようということ考えたから  
です。今年で12回目の開催に  
なりますが、それほど続くとい  
う期待はしていなかったのだ  
が、それぞれの年の経済状態  
に合わせて無理せず開催し  
てきました。

世界中にアートフェアという  
のはたくさんあります。アメリ  
カやスイスなど各地で開催  
されていまして、作品が売れる  
かどうかよりも、まずはフェア  
に参加することが

評価の一つの基準だとして開催地以外の国からの参加は多いのに、日本からの参加というのはまったくないと言っていいほど少ない。その背後にあるのは何かというと経費がかかるからです。それが一番ネックになるのですが、他の国の人たちはたくさん出ている。とくにここ15年ほど前からは韓国のギャラリーが増えています。韓国は15年前ごろにはまったく市場がなかったのに、どんどんアートフェアへ参加して自国の作家を紹介する。なぜかという理由を知り合いのギャラリストに訊くと、国から援助が出ているというのです。経費の全額、100%の年もあれば50%の年もあるけれど、援助が出るから参加できるのだと。だから売れなくてもいいのだと。そうして参加を何年か続けていると韓国の作家たちが、国際的にも評価されるようになって広まっていったという状況があります。

僕たちがART OSAKAを開催するにあたって、さまざまな助成金を求めながら毎年やってきたのですが、結局、今までの11回はゼロ、助成金はまったく受け取っていません。理由は、アートフェアというのは商業活動であるから、市場の問題であるからということで全部はねられてきたわけですから。

ところが、これはもう公表していいと思いますが、来年度からアートフェアのような商業的活動も含めた現代アートの取り組みに対して文化庁が、日本の作家や作品を海外に紹介する、もしくは国内であっても国際的に日本人の創造性を広くアピールするものに対して支援しようではないかという文書が、もうすぐ発表されると思います。それと同時に、障がい者アートという項目を文化庁の事業の中に設けて、支援してこうという動きが始まるようです。物事を実現していくにはかなりのお金が必要だということが認識されるようになったと感じ

ていますし、市場のまっただ中にある僕としては、藤原さんがおっしゃられたように、皆さんにアピールしてお金をいかにつくるかというアイデアを出していきたいと思います。

### アート市場以外の市場への挑戦

○佐々木 ありがとうございます。実は私の専門は経済学で、日本のメディアに登場する経済学者はほとんど新自由主義的な経済学者なのです。ところがヨーロッパなどに行きますとまったく状況が違っていて、市場経済万能ではなくて、社会経済や連帯経済というような考え方が非常に広がっています。そのようなところでは小さなビジネスが集まって、社会的に意義のある行動をどんどん創り出しています。一つ一つは小さくても、それが集まって大きな渦になっていけば、もしかしたら市場経済を転換することになるかもしれないという状況になりつつあるわけです。

次にお話いただくのは笠谷さんで、これまで笠谷さんは大阪府の事業とは直接関わりはなかったのですが、非常に社会性のある取り組みをされてきました。そのお話をいただきながら、大阪府の事業に対するアドバイスもお願いできますか。

○笠谷 こんにちは、笠谷です。僕は本職として広告関連の仕事をしていて、その本職とは別にPR-y（プライ）というプロジェクト



を主宰し、主に知的障がいを持つ方の創作物の魅力をPRする活動を2年半ほど前から行っています。今日は、PR-yが具体的にどのようなことをしているのか、主な3つの活動について簡単にご紹介します。

まず一つ目はフィールドワーク。2011年

からプロの写真家たちと一緒に障がい者施設を定期的に訪問し、彼らの創作風景を撮影しています。この2年半の間に大阪や滋賀、鹿児島などにある施設取材してきました。撮影日数はだいたい60日です。障がい者の創作物の魅力をPRするためには、やはり実際に彼らの創作現場を訪問して取材するというフィールドワークが必要不可欠だと思っていますので、これは今後も続けていこうと思っています。撮影した写真や映像はウェブサイト、あるいは写真集の出版といった形で公開しています。

2つ目の活動は、フランスのアール・ブリュット研究機関であるabcd（アーベーセーデー）の協力を得て、日本の障がい者の創作物を海外のコレクターやギャラリストに紹介し販売しています。これはいわゆるコンテンポラリーアート、現代美術ではなく、アール・ブリュット専門のコレクターやギャラリーに対して販売をしています。彼らはアール・ブリュットを、コンテンポラリーアートよりももっと純粹ですぐれたものであると捉えています。日本でも最近、アール・ブリュットという言葉がかなり認知されてきていますが、先ほど今中さんからお話があったとおり、「アール・ブリュットは障がい者のアートである」というような間違った解釈をされていたり、「現代アートというジャンルでは勝負できないから、アール・ブリュットとして位置付けよう」などと、少しネガティブなイメージを持たれる場合もあるようですが、僕が今、お世話になっているヨーロッパのアール・ブリュットのコレクターは、「アール・ブリュットは現代アートよりももっと純粹ですばらしいものだ」とシンプルに認識されておられ、日本の少し複雑な事情とは違うという印象を持っています。

そして3番目の活動がファッションです。これは障がい者の作品をデザインに取

り込んだNUDE：PR-y（ヌードプライ）<sup>1</sup>というファッションレーベルをプロデュースしています。主に障がい者の描いた作品を活かした洋服を創っていて、デザインに関してはプロのファッションデザイナーに依頼しています。よくミュージアム・ショップなどで見かける「作品をプリントしただけのTシャツ」のようなものをつくる気はなく、それぞれの作品の世界観や魅力をファッションデザインと融合させるような形で洋服を創りたいと、そのような思いから始まった試みです。また、洋服を創るのだったらファッションの市場で、それも国内だけではなく海外の市場でもきちんと評価されるような、クオリティの高いものを創りたいと考えていて、そこを強く意識しています。PR-yがファッションに関する活動を始めてまだ2年目なのですが、現在はヨーロッパを中心に世界12カ国のセレクトショップなどで取り扱ってもらっています。

大きくは以上の3つの活動を主軸にしていて、今日のシンポジウムのタイトルは「アート市場への挑戦」となっていますが、僕の場合は実はまったくアートにはとらわれていません。と言いますのは、障がい者といっても障がいの種類や程度は人それぞれに違います。少なくとも僕らが関わっている障がい者の方々は言葉でコミュニケーションができない、重度の障がいをお持ちの方がほとんどです。ですから、彼らが自分自身の創作物をアートだという認識もしていませんし、定義なんてできるわけありません。彼らの作品をアートだと定義しているのは、あくまで周囲の人たちです。それを否定するつもりはありませんが、彼らの創作物をもっともっとアート以外の領域にも採り入れていけるのではないのでしょうか。たとえばファッションデザイン、それ以外にもあるでしょう。どれだけ多くの

アウトプットの方法が出てくるか、それが今後の課題になるのではないかと考えています。

個人的には、美術館やギャラリー以外の場所でもっと多くの方々に障がい者の表現の魅力を知ってもらいきっかけづくりや場づくりが重要だと思っています。そのような意味で言うと僕の場合は、アート市場以外の市場への挑戦ということが課題になると考えています。先ほど申し上げたように、障がい者の創作物をアートだと定義しているのは、障がい者自身ではありません。オール・ブリュットの定義づけにしても同様です。同じようにファッションデザインに採り入れようとするのも僕であって、障がい者自身ではありません。けれど、障がい者がどれだけの才能を持っていても、それをご自身の力だけでは世にアピールすることはきわめて困難です。だからこそ、彼らに関わっている僕たちは責任を持って、プロとしての仕事をしなければならないと思っています。洋服であればファッションの領域で、グラフィックであればグラフィックの領域で、それぞれのジャンルできちんと認められるクオリティのものを発表しないと意味がないでしょうし、そのクオリティの追求こそが今後の課題だと思っています。ただ単に障がい者の描いた絵を額装して、それをギャラリーに展示して、これはアートです、価値のわかる人は買って下さいというスタンスでは、僕はなんとなく嫌悪を感じますし、その先の広がりには限られているのではないかと感じています。

いずれにしてもこの分野は、周囲の人たちの職能やバイタリティ、センス、そのようなものに依存する部分がきわめて大きいと思っています。そのような意味で言いますと、協働、コラボレーションという手段が、この分野ではとても有効だと考えています。さまざまな分野のプロフェッショナル

ルがコラボレーションという形で障がい者と関わり、いかに新しい価値を見出すことができるか。それが障がい者の表現の可能性を模索するということにつながるでしょう。

今日は僕自身が勉強させてもらおうと思ってここに座らせていただいております。どうぞよろしく願いいたします。

### 作品の収蔵のあり方は

○佐々木 新しい取り組みが紹介されました。私どもは、まだ価値のわからないものをどのようにして世に出すのか。あるいは、これまで価値がないとされていたものを、どのようにその価値を発見し発信して共感を得るのかという、そのような取り組みに向かっているわけです。たぶんそのアプローチの方法は非常に多様性がある。その多様なものを排除しないで、できるだけ違いを乗り越えてコラボレーションしていくか、そのような提言を笠谷さんにいただいたと私は受け止めています。

ここから残り約30分間で自由に、第一部のお話、それから4人のパネリストのお話から化学反応を起こしていただいて、もう少し挑戦し続ける議論をしたいと思います。どなたからでも、言い残した、あるいはもう少し深く言いたいということがあればお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

○山口 昨年、今中さんが関わっておられた国の会議で、障がい者の芸術活動を支援するナショナルセンター設立の話が出ていたかと思いますが、これはどのような結論になったのでしょうか。つまり大学との協働という形での終結なのか、それとも別の形になったのですか。

○今中 議論されていたのはオール・ブリュット・ナショナルセンター、これは仮称ですが、結果的には設立は却下されまし

た。却下の要因は2つほどありまして、一つはアール・ブリュットとしてカテゴライズするということに委員の皆さんが違和感をお持ちであったこと。もう一つは地域、それぞれの地域で多様な活動をされているわけで、それを東京という首都に集めてくることに違和感をお持ちでした。そのため、都道府県ごとにミュージアムを持つ、もしくは作家が暮らしている場所の近隣にある美術館に作品を収蔵していくというところで着地しました。

○山口 それはとても残念なことではないかという感じがするのです。僕は別に社会主義者ではありませんが、なければならぬ、いくつか重要なものの一つとしてセンターという施設は考えられるのではと思います。ナショナルセンターという呼び方は別として、また、単なる建物ということだけではなく、障がいを持つ人たちが行ってきた表現活動、これは一つの文化だと思いますので、これを顕彰していくような施設はあった方がいいと感じますね。

先ほどアート市場の状況について話しましたが、アート市場と言うとすでにわが国にそのようなものがあると思われがちなのですが、非常にシビアな言い方をすると、現代美術の市場というものは日本にほとんどなくなっている。では、いったいどこへ移っているかと言えば、東アジアです。香港です。香港ではヨーロッパの主要な画廊がどんどん支店を出していますし、ものすごく扱う量が違います。日本は本当に残念ながら現代美術の市場はなく、厳しい状況にあります。そうであるがゆえに、障がい者アートという言葉がいいかどうかは別としても、障がい者の方々の作品を一つの起点としてムーブメントをつくっていくことが大切でしょう。先ほど笠谷さんがおっしゃったように、作品を額縁に入れて見てもらうだけではなくて、ファッションデザ

インなどのいろいろな形で発信していく、そのようなデザインであるとか周辺のジャンルを含めて発信していく拠点が必要ではないか。大阪にとってもぜひ、そのようなムーブメントをつくって、発信していくことが大事ではないかということをおもいます。

### 継続こそが状況打破に

○佐々木 困難な中であつてもあえて挑戦する、あるいは小さなムーブメントを意義のある形で広げていく。それは山口さんが取り組んでこられたART OSAKAについても言えることだと思います。一方、多額の経費をかけて大きなことをしようとした大阪トリエンナーレ<sup>2</sup>は、10回で終了したと聞いています。粘り強く続けてこられたART OSAKAは草の根型、あるいはボトムアップ型と言えるでしょうね。そのようなアート市場の作り方について、ご意見があれば伺いたいのですが。

○山口 結局は、やらなければならないなら、どんな困難があつてもとにかく動き出さないといけないということです。

僕たちは2002年に初めて「ART in CASO」というアートフェアを開催しました。その後「ART OSAKA」という名称に替えたのですが、当初から現代美術だけを対象にするということを銘打っていました。それまでも日本にはアートフェアというのはいろいろありましたが、古美術のギャラリーが参加したりしていて、現代美術だけを対象にしたフェアはまったくありませんでした。現代美術のフェアというものをやったのは、たぶん僕たちが初めてだと思います。

2002年の頃は どうやって生き残るかという状況で、無理しないのできる方法を仲間と話し合いながら一所懸命に考えだしました。そして、海外のフェアへ参加すると

200万、300万円かかるというのが相場だった当時、僕たちのフェアは12~13万円ですべて賄いますという設定を創り出したのです。フェアの会場費は安価になるよう交渉したり、設営や広告は各画廊が行うようにしたり、知恵を絞ってフェアの場所を創りました。そして、当時の画廊はみんなしんどかったというか、まったく画廊で商売ができない状況だったので、現代美術を紹介するきっかけになればいいということで、東京や名古屋などからも参加してくれました。4回続けて開催しましたが、ほとんど作品が売れなくて継続できない状況になりました。赤字続きでしたが、止められなかった。このままではいけないと、もっと人が来てくれるような場所でしょうと新しい会場を探し求め、スペースとしては十分ではなかったのですが、梅田周辺にあるホテルの部屋を使って展示をしてみようではないかという案が出ました。2007年にそこでやったときに、初めて爆発的に売れたのです。3日間で約4,500人もの来場があり、ホテルのエレベーターに乗りきれないぐらいの人が集まりました。

場所性もあるわけですが、それよりも大事なことは継続して行うことではないかと。続けているとART OSAKAというものに興味をもって集まってくる関係者の人数がどんどん増えてきて、去年は10軒ほど海外からのギャラリーが、韓国やシンガポールなどから参加してくれて、ずいぶん国際的な催しになってきました。原点を忘れずに、お金がなければならぬ動きをしようと、僕は経験上そう思っていますので、そのような方法を探ってきたわけです。だから今日のテーマに関しても、お金のないときは頭を使って、何かできる可能性があるのではないかと思います。

○佐々木 どうもありがとうございます。この大阪府の事業は、先ほどから言ってい

るようにほとんど予算がないのですが、いろいろなところからファンドレイジングして、寄附金などで継続していますが、この事業をどのように定着させられるか、そこに知恵を働かせたいなと思っているところです。

たとえば、先ほど藤原さんから海外に紹介してはどうだろうという、非常に積極的な提言をいただきました。先駆的な事例として、アトリエ インカーブのアーティストの作品がニューヨークのギャラリーで扱われたということもあります。それがあって、国内では評価されなかったけれども海外で評価されたということで、アーティストの自信になりますし、アーティストの周辺にいる人たちにも勇気を与える。ですから、海外へも視野を広げながらやりたいとおっしゃられましたが、そのあたりについてももう少し、お考えを聞かせてください。

○藤原 一企業で支援するというよりは、いろいろな方々を巻き込む場を提供することがいちばん私どもが協働しやすい方法だと思っていますし、実はこの方法が意外と長続きするのです。いろいろな方々を巻き込むということは、我々も労を惜しみませんので、ぜひとも協力させていただきたいと思っています。しかし、残念ながら、こういう取り組みを知らない人がやはり多いのも事実です。今日、この場に来ていただいている方々は関心を持ってくださっていますが、まだまだ、もっともっと多くの方に知っていただかなければいけないでしょう。もっと言えば、自分の部屋に絵を飾ろうというアートに関心のある人もまだまだ少ないと思います。

知っていただくためには問い続けるしかないと思っていますが、その問い続ける活動はまだまだ不足しているような気がしてなりません。ですから、ぜひともいろいろな形で問い続けていくことこそが、この事



業の継続性を担保するところだと思います。その中で私どもに何ができるかと言うと、先ほどコラボレーションというお話がありましたが、プロフェッショナルとして◎◎のようなことができるという人たちに、その強みを活かして、この事業にいろいろな形で関わっていただくきっかけをつくる。これこそがコラボレーションそのものであり、広がりやの起点になるのではないのでしょうか。起点がたくさんできることで、裾野が広がり、マーケットが生まれていくのだと思います。

### 「山」を見出す勇気と 「裾野」を広げる努力を

○佐々木 笠谷さんからは先ほど、アート市場以外の市場への挑戦ということをおっしゃられ、そこでの経験も紹介していただいたのですが、笠谷さんから見られて、これまで大阪府がやってきた事業についてどう思われますか。このような場ですから率直に、ここは少し足りないのではないかなど、アドバイスやご批判などがあればいただきたいと思います。

○笠谷 大阪府に限らず障がい者アートの展覧会は各地で開催されていますが、個人的にはワクワクするような展覧会というのがあまりなくて、それは単純にプロモーションの問題なのかなと感じています。

それと、たまにPR-yの活動に対してご意見をいただくことがあって、「あの人の作品を使っているのに、なぜこの人の作品を扱ってくれないのか」というものです。そういうご意見をいただいた方に限らず、日本にはどこか、「障がい者はすばらしい絵を描く、みんな天才ですよ」と感じてしまう風潮があるように思います。オール・ブリュットについてのお話もありましたが、今の国内での動きが完全に進行していってしまうと“障がい者のアート”という言葉が“オール・ブリュット”に言い換えられるだけではないか。そうなると実際の状況は何も変わらず、もともと関心のない人は「どうせ障がい者のアートでしょう」で済ませてしまうように感じます。第一部のキーワードに出ていた“山高ければ裾広し”を実現させていくには、障がいを持っている方のうち本当に才能のある人を持ち

上げていくという活動に勇気を持って切り替えないと、いつまでも障がい者アートとして一括りにされることと同じで、障がい者は一括りにされてしまうと思います。そのあたりが僕の知るかぎり、大阪府に対してだけではなく日本の福祉の動きとしてあるように思っています。

○佐々木 ありがとうございます。現在、府の公募展の3回目の準備中です。これから本格的な審査がありますが、1回目からずっと南畠さんは審査員をしておられます。南畠さんは審査をされて、どのような感想をお持ちですか。私はどんどん新しいアーティストが登場しているように思うのですが。

○南畠 まず審査に際して、これは僕自身の基本的な考え方ですが、冒頭で申し上げたように彼らはいい絵を描こうとして描いているわけではありません。そこはすごく大事なことであり、忘れてはならないことだと思っています。ですから、現代アートということと彼らの思いというものを私たちはどのように審査していくか、実はかなり難しい問題です。もちろん最優秀賞や優秀賞を取った人の作品はすばらしく、とくに前回の最優秀賞を受賞された西脇さんの作品は、そのまま世界のマーケットに出せば十分に評価を得られるという確信を持つぐらいのレベルを持っています。しかし、一口に障がいといっても非常に多様なわけです。知的障がい、身体障がい、あるいは聴覚障がいをお持ちの方が自己表現として絵を描く、あるいは物を創るということはそれぞれ微妙に距離感が違う。それに対して私たちは解決を順延させているような状況のまま、彼らの作品に接しているという現実もあるのです。そのところは理論的な裏付けというか、公募展という視覚的な芸術によるコンクールにおいて行うことの意味づけみたいなものは、しっかり併せて

やっていかなければいけないでしょう。

あと、もう一つ気になるのは、参加されてくる授産所というか作業所がほとんど同じで、あまり増えていない気がします。すると当然、そこからの出品者も繰り返しになる。今は大阪府内だけが対象ですが、もっと広い地域からということになれば新たな広がりが出てくる。大阪府の事業だから大阪府内だけが対象というのではなく、プロモートするのが大阪府であればいいのであって、担当者は大変かもしれませんが試みる価値はあるでしょう。先ほどの協働という言葉思い出せば、学生たち、いろいろな人たちのボランティア的な広がりをもって、それがますます溢れていけば、そのままフェスティバルにしていけばいいのであって、うまくアートの広がり場をつくっていくということが、実はこのプロジェクトの中から私たちに与えられている課題でもある気がします。

### 大きな波となる“ゲームチェンジャー”に

○佐々木 以前行われた大阪府の調査結果によると、府内のいろいろな福祉関係の施設では創作環境が十分に整えられていないところや、創作環境を積極的に拡充していく意思決定のできないところが結構ありました。そのようなところがもっと取り組むようになれば、さらに大きなムーブメントになるという予感はあるのです。ただ、そうなるためには国がこういう関連の事業を支援する予算計上を含めて、もう少し大きなフレームがやはり必要でしょう。また、大阪で起こったムーブメントがさらに広域的に展開する、たとえば滋賀県で起こっているムーブメントと交錯するというか、お互いに刺激しあいながら別の広がりを持つ可能性もあるでしょう。このようなことが考えられるわけですが、残念ながら私どもはそう言いながらも、主体としては





小さいというか、専門的に関わっているわけではなく、ボランティアでやっているという状況です。いきなりナショナルセンターをつくるのがいいのかわかりませんが、できれば私は多様性のあるネットワーク型の組織展開ができれば、もっと変わっていけると思います。そのようなこれからの取り組み方法も含めて、コメンテーターの村木さんから感想あるいは意見をいただけますか。

○村木 ありがとうございます。この分野の支援を国に強化していただきたいというのは、そのとおりだと思います。実は、アートではなくスポーツの分野の話ですが、これまでオリンピックとパラリンピックの所管はオリンピックは文部科学省、パラリンピックは厚生労働省と二つに分かれていました。いわゆる縦割りだったわけですが、パラリンピックで世界的に活躍する選手がどんどん出てきたこともあって、この4月からの所管は文部科学省になります。つまり、障がい者のスポーツの分野では山の頂のところを文部科学省に任せた。一流選手として活躍していただける人のためにはそ

の方がいいのです。裾野の部分、社会参加としてのスポーツの部分は今までどおり厚生労働省が担当するのですが、そのように考えていくとアートの分野も山の頂の部分の支援のあり方を検討していかなければいけない時期に差し掛かっていると思います。やっと文化庁と厚生労働省が一緒にいるいろんなことをやり始めて、いくつか金平糖の尖った先が見えてきているので、国が本当に支援しなければいけない部分は何かということが、もう少しすれば見えてくるのかなという気がしているのです。それがナショナルセンター設立なのか、ネットワーク型の事業に対する支援なのかは、まだわかりませんが。

文部科学省も厚生労働省も少額ですが来年度は少し予算が付きますので、その中でモデルを育ててみる、実験をやってみるという予定になっています。数年前の両省の懇談会のときは予算に結びつかなかったのですが、今度はやっと少額ですが予算に結びついて一歩進んだという状況なので、新たな試みをいろいろ実践していくなかで、全体として大きな波をつくることができ

ばと思っています。

その大きな波にするための大事なキーワードになるだろうと思っているのは“ゲームチェンジャー”という言葉です。この言葉はどこから出てきたかと言いますと、ちょうど今、安倍総理が女性の活躍が必要だと言ってくださるものですから、そのことについて議論が活発に行われています。その中で、「ダイバーシティはゲームチェンジャーだ」ということも言われていて、障がい者のアートについてももっと発展させて育てていこうという動きが一種のゲームチェンジャーになるのではないかと。先ほど山口さんが「障がい者の方々の作品を起点にして」とおっしゃられました。要するに障がい者のためにというだけではなくて、全部を動かす、社会のルールやありようを変えるゲームチェンジャーとしての動きをなんとかつくりたいと思います。そのためには“問い続ける”という言葉もすごくいいキーワードになるでしょうね。

もう一つ、今日のお話の中で私もすごく共感したのは、支援する人がプロにならなければいけないし、障がいだからということが甘えになるという状況だけは避けなければいけないということです。これはアートの話だけではなくて、何かの商品を作る場合もそうです。クッキーやパンを作るときもまったく同じで、これは障がい者が作ったものだから、少しここはごめんなさいねと言ったとたん、全体のレベルが下がってしまう。あるいは一生懸命やっている方々の足を引っ張ることにもなりかねません。そうならないためには何が必要かという、やはり支援者に甘えがないという、支援者がプロであることが重要だと思います。

そう考えると、ある支援者がすべての分野のプロになるというのは非常にむずかしいことなので、それぞれの分野の一流の人

たちと連携して何かをする。今日のお話の中に出てきた“協働”というのはすごく大事なキーワードになると思います。協働の仕組みをどのようにつくっていくか、そこに関してはまだ絵が描けてないというか、役所は創造的な知恵があまりない。ただ、皆さんからいただいた知恵を整えていくのはとても上手ですから、この波を消さないで次の波へつなげていくために、どうか皆さん知恵をください。

### クオリティの担保と

#### 協働による多様な回路の開拓を

○佐々木 大阪はいくらでも知恵を出せると思います。今中さん、いかがですか。

○今中 大阪にはたくさん能力のある方がいらっしゃるのだと、今日お話を聞いて改めて思いましたし、村木さんがおっしゃったようにやはりいちばん大事なものは僕を含めて周りの黒子のクオリティの高さだと思います。本当に黒子がどれだけ力を合わせてプロジェクトをつくっていくのかにかかっている、ただ、それはテクニックだけのことではなくて、今日すごく熱く語っていただいた南畷さんのおっしゃる魂の部分、気持ちも大切でしょう。なおかつ、笠谷さんの取り組みは孤独な戦いであるかもしれませんが、非常にクオリティの高いデザインを世の中に提供しておられる。笠谷さんは本業を別にされながら、PR-yの活動をボランティアでされているわけです。今後、ボランティアではなく有償の仕事になっていくような道を笠谷さんがつくっていくでしょうし、笠谷さんのような志を持ったデザイナーが多く出てきて大阪に集結していくと、もっともっと面白くなるかと期待しています。

○佐々木 ありがとうございます。では最後にパネリストの方々、言い残したことがあれば一言ずつ、どうぞ。

○山口 先ほど、ART OSAKAの話をしました。今年の夏に開催するフェアには福祉施設からの参加申し込みもあるようです。そういった施設の参加については、もちろん作品のクオリティ等についてはある程度の審査をさせていただきますが、それ以外の点では一般のギャラリーと同様、まったく区別のない形で参加していただけます。アートフェアへの参加という新たな試みには期待もあります。僕たちはオープンに場所を提供していますので、フェアへの参加を試みる施設が増えればとも思います。

もう一つ、先ほど文化庁の予算の話しましたが、去年のART OSAKAへ文化庁の担当の方が視察に来られています。やはり継続してやってきたからだと思うし、そういう自分たちの努力がなければ行政の予算の獲得もなかなかできないのではないかと思います。

○南嶌 ずいぶん前になりますが、インカーブの新木くん、僕は新ちゃんと呼んでもらっていますが、新ちゃんの作品を最初に見せていただいたとき、実は作品の話よりもプロレスの話で盛り上がりました。新ちゃんは格闘技が好きで、僕もプロレスが大好きなんです。今はI.W.A.チャンピオンのオカダカズチカを応援しているので、彼のTシャツを新ちゃんに作ってもらいたいと思うのです。そんなふうには、新ちゃんに障がいがあるとかないとか全然関係なく、プロレスで盛り上がってしまう。そのような回路というのは、実は世の中にはたくさんあるはずなのですが、今は画一的な回路だけで社会をつくりあげているところがある、とても問題だと思います。だから、そういう社会の状況を打ち破っていく一つの方法が、アートなのではないかと思っています。

○藤原 ぜひとも今日のような機会、もっ

ともっと多くの方に知っていただけるようなシンポジウムや展覧会の開催など、今日お越しの皆さんのお力もいただきながら、大阪からこの事業についてどんどん発信していければと思います。本日はどうもありがとうございました。

○笠谷 なんらかの形で就労支援につながるような、小さなビジネスのきっかけづくりもすごく大事ですし、先ほど藤原さんが話されたように、今日このような場に来られている方は、もちろんこの分野に関心のある方々ですが、社会全体の中では残念ながらごく一部なんだと思います。ですから、この分野について広く知っていただくきっかけづくりや、この分野に関わると楽しい、面白くてワクワクするというイベントづくりなどもできればと思います。ありがとうございました。

○佐々木 皆さんには長時間お付き合いいただき、ありがとうございました。パネリスト4人の方々にはそれぞれの持ち味を十分発揮していただきましたし、第一部のアットホームで和やかな対談もすばらしく、中身の濃いシンポジウムになったのではないかと思っています。

現在、私は大阪市立大学都市研究プラザの所長を務めています。プラザは2006年に設立され、私自身の研究テーマであります“創造都市”、すなわち「市民一人ひとりが創造的に働き、暮らし、活動できる都市」を具現化させるためにさまざまな研究と実践を積み重ねています。創造都市を具現化していく際に重要なことは、社会の周辺に追いやられている人たちが元気になる、尊厳を取り戻していくような取り組みがさまざまな分野で実践されていくことです。そのためにも障がい者の芸術表現はインクルーシブな社会を創っていく上で欠くことのできない分野だと考えておりますので、今後も仲間とともに研究と交流の場を

つくっていきたいと思います。どうもありがとうございました。

(了)

<注>

- 1 NUDE：PR-yは2014年度に発表した2015年春夏コレクションから、ブランド名を“DISTORTION3”に改称した。
- 2 大阪の魅力を国内外にアピールするため、1990（平成2）年度から実施された国際公募展。主催は大阪府他。1990年度から1998年度までは絵画・版画・彫刻の3部門について毎年交互に開催、2001年度の第10回には現代美術のすべての分野を対象として開催され、終了した。

## 参考文献・参考URL

---

- 今中博之 [2009] 『観点変更——なぜ、アトリエ インカーブは生まれたか』 創元社
- 神谷梢 [2010] 『アトリエ インカーブ——現代アートの魔球』 創元社
- 川井田祥子 [2013] 『障害者の芸術表現——共生的なまちづくりにむけて』 水曜社
- 佐々木雅幸 [2009] 『創造都市と社会包摂——文化多様性・市民知・まちづくり』 水曜社
- 佐々木雅幸共編著 [2012] 『創造都市への挑戦——産業と文化の息づく街へ』 岩波現代文庫
- PR-y [2012] 『THE CORNERSTONE』
- PR-y [2014] 『DISTORTION』
- PR-y [2014] 『DISTORTION2』
- 大阪府 [2009] 「アートを活かした障がい者の就労支援に関する提言」  
<http://www.pref.osaka.lg.jp/jiritsushien/jiritsushien/art.html>
- 厚生労働省・文部科学省 [2008] 「障害者アート推進のための懇談会」報告書  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/sanka/bunka.html>
- 厚生労働省・文化庁 [2013] 「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会中間取りまとめ」 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000017422.html>
- アトリエ インカーブ <http://incurve.jp/>
- ART OSAKA <http://www.artosaka.jp/>
- PR-y <http://www.pr-y.org/>

**村木厚子（むらきあつこ）氏**

厚生労働事務次官

1978年労働省（現・厚生労働省）に入省。障がい者支援、女性政策などに関わり、雇用均等・児童家庭局長などを歴任。障がい者問題を自身のライフワークとし、異動で担当を離れた後も福祉団体への視察を続けてきた。近年は内閣府政策統括官（共生社会政策担当）および社会・援護局長として福祉や生活保護、ホームレス対策などにも携わり、2013年7月より厚生労働事務次官に就任。

**今中博之（いまなかひろし）氏**

社会福祉法人 素王会 理事長／

アトリエ インカーブ クリエイティブディレクター

一級建築士としての仕事と、偽性アコンドロプラージア（先天性両下肢障がい）をもつ自らの体験を通じた視点で、社会福祉法人の経営企画・空間設計、企業や自治体のプロジェクトに多数参画。文部科学省・厚生労働省等の懇談会委員や国際障害者交流センター総合ビジョン策定検討会委員を務めるとともに、金沢美術工芸大学非常勤講師、京都大学地域研究総合情報センター研究員としても「福祉×アート」の重要性を発信している。著書に『観点変更』（創元社）等がある。

**<パネリスト> \*50音順****笠谷圭見（かさたによしあき）氏**

PR-y主宰／RISSI INC. 取締役副社長

クリエイティブ・ディレクターとして広告・映像・書籍・インテリア等のデザインに携わる傍ら、知的障がい者による創作物の魅力を世界に向けて発信するPR-y（プライ）というプロジェクトを主宰。様々なジャンルのクリエイターやアート関係者らと連携し、海外のギャラリーや研究機関との橋渡しを手がける。また、知的障がい者とのコラボレーションによるファッションブランドを立ち上げ、国内外のマーケットへの進出を果たしている。

**藤原明（ふじわらあきら）氏**

りそな総合研究所 プロジェクト・フェロー／

りそな銀行大阪地域インフォメーションオフィサー、

法人ソリューション営業部アドバイザー

天神橋筋商店街定期預金「百天満天百」をきっかけとした繁昌亭チャリティ寄席、清酒醸造による商店街活性化、FM802との「RESONART」キャッシュカード、魔法瓶メーカーとの「マイすいとう」など、企業や地域の活性化の取り組みは500を超えている。2007年米国国務省インターナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム招聘。立命館大学経営大学院・デジタルハリウッド大学院・大阪電気通信大学客員教授。

## 南 篤宏 (みなみしまひろし) 氏

美術評論家／女子美術大学教授／武蔵野美術大学客員教授

インドを放浪後、いわき市立美術館、広島市現代美術館などの創設に参画。パリ・カルティエ現代美術財団への留学を経て、熊本市現代美術館長、プラハ・トリエンナーレ2008国際キュレーター、ベネチア・ビエンナーレ2009日本館コミッショナーなどを歴任。ヒロシマ、アウシュヴィッツ、ハンセン病、東日本大震災などの経験を、「世界回復」(re+habilis)への導きの経験として受け止め、芸術表現の意味を根本的に捉え直し続ける。

## 山口 孝 (やまぐちたかし) 氏

ギャラリーヤマグチ クンストバウ代表／ART OSAKA相談役

大阪堂島のギャラリーで7年間勤務後、1981年に肥後橋大同生命ビルにてギャラリーヤマグチを設立。2004年に大阪市港区の近代建築ビル内に移転し、名称を「ギャラリーヤマグチ クンストバウ」に変更。ギャラリー運営だけでなく、美術館での展覧会のオーガナイズや公共施設のアート設置などにも携わる。また、2002年国内で唯一の現代美術のアートフェアを組織化し、2011年まで実行委員長を務めた。

## <モデレーター>

### 佐々木雅幸 (ささきまさゆき)

大阪市立大学都市研究プラザ所長／同大学大学院創造都市研究科教授

わが国における創造都市論の第一人者であり、市民一人ひとりが創造性を発揮する重要性を唱えるとともに、NPO法人都市文化創造機構の理事長として創造都市の具現化と国内外のネットワーク構築に取り組んでいる。博士(経済学)。文化経済学会<日本>会長(2008-2010年)、国際学術雑誌*City, Culture & Society*の編集長も務める。著書は『創造都市への挑戦』(岩波現代文庫)、『創造都市と社会包摂』(水曜社、共編著)他多数。





URP GCOE DOCUMENT 14

アート市場への挑戦：障がい者の芸術表現の可能性

発行日：2015年3月

監修：佐々木雅幸（大阪市立大学 都市研究プラザ 特任教授 [前所長] / 同志社大学特別客員教授）

企画・編集：川井田祥子（大阪市立大学 都市研究プラザ 特任講師）

写真撮影：ヨシダダイスケ

発行：大阪市立大学 都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

電話 06-6605-2071 FAX 06-6605-2069

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

本刊行物は、文部科学省共同利用・共同研究拠点大阪市立大学都市研究プラザ  
先端的都市研究拠点との共同研究の成果によるものである。

URP GCOE DOCUMENT 14

Challenge to the art market:

Possibility of the artistic expression of the disabled people

Published in March, 2015

Supervised by Masayuki Sasaki (Professor [Former Director], Urban  
Research Plaza, Osaka City University/ Professor, Doshisha University)

Planned and Edited by Sachiko Kawaida (Lecturer, Urban Research Plaza,  
Osaka City University)

Photography by Daisuke Yoshida

Published by Urban Research Plaza, Osaka City University

Urban Research Plaza, Osaka City University

3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi-ku, Osaka,

558-8585 JAPAN

Tel: +81-6-6605-2071 Fax: +81-6-6605-2069

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

---

©2015 Urban Research Plaza, Osaka City University

ISBN 978-4-904010-15-0

Printed in Japan

